現代中国仏教の研究

末木　文美士

はじめに
第一節　現代中国における仏教の状況
一、現代仏教の展開
二、仏教協会
三、出家と受戒
四、教育
五、寺院生活
六、信仰の形態
第二節　九華山仏教の現状
一、九華山仏教の特徴
二、九華山における仏教の現状
三、九華山仏学院の活動

四、九華山仏学院関係資料
五、（付）揚州高旻寺の現状
第三節　『九華山百歳宮応身菩薩事迹記』について

はじめに

今日、多くの日本の仏教研究者が中国を訪れ、調査・研究を進めている。しかし、それらの多くは、過去の仏教遺跡が今日どのような状態にあるかとか、かつて中国を訪れた祖師の足跡を尋ねるとかいうように、過去の仏教の研究を目的とするものであり、今日の中国の仏教の現状がどうなっているかという、現代に視点をおいた調査・研究は極めて少ない。筆者もその面に関して決して詳しいというわけではないが、幸い二回にわたる調査を行ない、いくぶん知見を広めることができた。

即ち、第一回は一九八八年九―一一月に東洋文化研究所蜂屋邦夫教授を研究代表者とする文部省科学研究費海外調査による中国道教調査団に加わり、陝西省・四川省を中心に調査することができた。この時は道教の調査が主であったが、仏教に関してもいくつかの仏寺を訪れ、調査することができた。この時の記録は、蜂屋教授の編になる『中国道教の現状』全二冊（本文冊・図版冊各一冊、汲古書院、一九九〇）にまとめられている。

第二回は、一九九〇年一〇月一五日より二六日まで、庭野平和財団の助成により、九華山を中心に調査した。この時は、筆者を研究代表者として、以下の三名が共同研究者として加わった。

曹章祺（上海科技管理幹部学院副教授）、蓑輪顕量（千葉県立衛生看護短大講師）、西本照真（東京大学大学院）その際の旅行記風の記録は蓑輪氏が『仏教文化』（東大仏教青年会）第二十五巻（一九九二）に発表したので、参照されたい。

ここでは以下、第一節でこれらの調査の記録や収集資料、及び最近中国で刊行されている研究書[1]によりながら、中国仏教の現状について概略を記し、第二節では、二回目の調査に関して、主要な座談記録や資料を掲載しながら、一事例として九華山仏教の現状理解を目指す。第三節では、第二回調査で入手した小冊子『九華山百歳宮応身菩薩事迹記、附当代往生記実十二例』を翻刻紹介し、現代中国における仏教信仰を知る手がかりとしたい。

資料の整理にあたっては、蓑輪・西本両氏の協力を得た他、第三節の資料清書は東京大学大学院森田英仁氏にお願いした。

第一節　現代中国における仏教の状況

一、現代仏教の展開

中国の仏教は宋・明時代以後、次第に衰退に向ったが、十九世紀後半から二十世紀初めにかけて、近代思想の影響のもとに優れた指導者が現われて、研究・教育・出版などの分野に大きな成果を上げた。しかし、解放前の中国においては、社会の混乱や内乱、対日戦争などのために寺院は荒廃し、仏教の活動も停滞するに至った。解放後、言うまでもなく、今日の中国は中国共産党の指導下に社会主義政策を堅持している。マルクス主義の立場に立つから、当然

無神論・唯物論の立場が強いが、一定の制約の下で信教の自由が認められ、宗教活動が行なわれている。文化大革命による破壊の後、今日では各地で仏教寺院が復興され、その活動も活発になっている。

信教の自由の根拠となるのは、憲法第三十六条（一九八二年改正）である。

中華人民共和国公民有宗教信仰自由。任何国家機関、社会団体和個人不得強制公民信仰宗教或者不信仰宗教、不得歧視信仰宗教的公民和不信仰宗教的公民。

信仰の自由と同時に不信仰の自由もうたわれているところが社会主義国家らしい。

内戦や抗日闘争、社会主義革命などの歴史は仏教思想の上にも大きな影響を及ぼした。その一つは「人間仏教」思想の発揚であり、もう一つは「慈悲」「不殺生」などの教義に対する新解釈である。(2)「人間仏教」というのは、日本語に訳せば「現世仏教」「世俗仏教」とでもなるところで、仏教は来世の幸福だけでなく、現世の幸福にも努めるべきだという考え方である。それは、言うまでもなく祈禱などによる現世利益ということではなく、祖国の建設や人民への服務に仏教徒も種極的に参加すべきだというもので、中国仏教協会の規約に「莊厳国土、利楽有情」とうたわれている通りである。

第二点は、反帝国主義の闘争の中で形成されたものである。「慈悲」とか「不殺生」とか言っても、現実に帝国主義の侵略と戦わなければならず、抽象的な「慈悲」や「不殺生」は意味をなさない。それ故、「仏教の慈悲は広大な群衆を対象とするものである。大多数の人の利益と安楽のために、群衆に危害を加える少数の悪魔を消滅させるのが、仏陀の大慈大悲の偉大な意義である」と解されるのである。もう一つこの思想を推進したのは、仏教寺院における農業生産の発展である。その為には害虫を殺さなければならず、「治虫救苗、也是菩薩行為」と解されることにな

った。

因みに、人間仏教とは言っても、呪術・迷信の類は正常な宗教活動とは区別され、禁止されている。この点、後述する。

二、仏教協会

今日中国における仏教の活動の中心になっているのは中国仏教協会である。同様の全国規模の愛国的な宗教組織は他の宗教にもある。即ち、中国道教協会、中国伊斯蘭教協会、中国天主教愛国会、中国基督教三自愛国運動委員会、中国天主教教務委員会、中国天主教主教団、中国基督教協会であり、中国仏教協会を加えて八個の主要な組織がある。(3)

中国仏教協会の歴史を振返ると、解放後、早くも一九五〇年頃から各地に仏教協会準備会などが結成され、一九五二年一一月には北京で中国仏教協会準備会議が開かれ、一九五三年五月に正式に北京で中国仏教協会が成立した。初代の会長は円瑛法師である。その後の全国代表会議は以下の通り開催されている。

第二回　一九五七年三月　北京　会長・喜饒嘉措
第三回　一九六二年二月　北京　会長・同右
第四回　一九八〇年一二月　北京　会長・趙朴初

この間、一九六六年から第四回会議の開かれるまでは、文化大革命のために活動が停止している。

「中国仏教協会章程」（一九八〇年）によると、中国仏教協会の任務は以下の四つである。

一、団結和倡導広大仏教徒参加各項為人民服務的工作、「荘厳国土、利楽有情」。
二、在愛国愛教的立場上、維護教徒信仰自由的権利、推動教徒学習宗教政策和其他有関宗教政策法令、做到愛国守法。支持教徒管好宗教活動場所、開展正常的宗教活動。
三、積極開展仏教教育和学術研究、出版仏教書刊、協助政府保護文物古迹。
四、発展与各国仏教徒的好聯繫、増進中外仏教文化交流。

第一条は先に触れた「人間仏教」の思想を表明するものである。第三条に関しては、教育機関として中国仏学院を運営し、また、出版に関しては定期刊行物として『法音』を出している他、単行本も出している。従来、仏教徒の団体である仏教協会と、大学や研究所に所属する仏教研究者との交流は必ずしも密接ではなかったようであるが、最近は合同で研究大会を開くなど、積極的に協力の動きが見られるようである。第四条に関しては、香港、マカオなどの華僑との関係をはじめ、インド・アメリカ・日本など、幅広い交流を図っている。日本の仏教者の訪中団も中国仏教協会を窓口として行なわれることが多い。

中国仏教協会は本部を北京広済寺に置き、組織としては、全国代表大会の下に、理事会・常務理事会があり、理事会会長・秘書長各一名、副会長・副秘書長若干名がいる。中国仏教協会には、以下の組織が置かれている。

部――研究部・国際部・教務部
辦公室
直属単位――中国仏学院・仏教図書文物館・南京金陵刻経処

全国組織である中国仏教協会に対して、各省や市、あるいは県などの行政区分に対応してそれぞれの地方の仏教協

会がある。道教協会はいまのところ一部の省にしかないが、仏教協会はすべての省にあるという。その下の単位の仏教協会はすべての地域にあるわけではなく、大きな寺院を持つところにあるようである。筆者は二回の調査で、陝西省（西安市大興善寺）・同省宝鶏市（扶風県法門寺）・四川省（成都市文殊院）・上海市（玉仏寺）・安徽省九華山の仏教協会を訪問し、話を聞くことができた。また、「四川省仏教協会章程」及び四川省人民政府宗教事務局辦公室刊行「我国現行法律中有関宗教方面的条文及我省各教管理条例彙集」を恵与され、それらは『中国道教の現状』資料篇に収録されている。特に後者に収録された「四川省仏教協会漢族地区寺廟管理辦法」は、仏教協会や寺院の具体的活動を知るのによい手がかりとなる。なお、各地の仏教協会は大きな寺院に置かれることが多いようであるが、九華山の立庵はごく小さな寺であり、また、揚州市の仏教協会が置かれているという旌忠寺は荒廃しており、どのような形で活動が行なわれているのか不明であった。

これらの地方の仏教協会も基本的な組織・構造は中国仏教協会と同じで、会長・副会長・常務理事・理事などが置かれている。しかし、地域によって多少の相違が見られる。例えば、上海仏教協会は登録された居士が会員となり、会員はすべて一般の理事になるという（数百名）。上海では居士仏教が盛んなためであろう。

「四川省仏教協会章程」によると、その任務は次のように規定されている。(4)

一、根拠憲法和法律的規定、維護教徒信仰自由的権利、推動教徒学習宗教政策和其他有関政策法令、做到愛国愛教、遵紀守法、指導和協助仏教徒管好寺廟、辦好教務、開展正常的宗教活動、制訂寺廟管理、収徒伝戒等具体辦法。

二、挙辦仏教教育事業、積極培養僧伽人才和開展学術研究工作、保護仏教文物古迹。

三、団結和引導全省各民族仏教徒積極参加各項為人民服務的工作、興辦和賛助社会福利事業。

四、積極開展同港、澳、台同胞和海外僑胞中仏教徒的聯誼工作。

先の中国仏教協会の場合と較べてみると、活動が実際の寺院や信者と関係した具体的な内容になっており、また、その地方の実情を反映していることが知られる。例えば、第一条では、実際の寺院管理や授戒という具体的な問題が扱われている。また、第三条で「各民族」と言われているのは、チベット族などの少数民族を抱える四川省の実情を反映している。また、中国仏教協会が広く外国との交流をうたっているのに対し、ここで特に香港、マカオ、台湾が挙げられているのは、これらの地域の華僑を中心とする仏教信者が経済的に大きな力となっているからである。これに対し、上海仏教協会は中国仏教協会と同様、幅広い海外交流を進めている。また、陝西省仏教協会は日本との交流を重視しているようである。なお、教育活動に関しては、地方の仏学院はそれぞれの仏教協会によって運営されている。出版に関しては、四川省仏教協会では特に行なわれていないが、上海仏教協会では『上海仏教』という機関誌を刊行し、また、九華山仏教協会では『九華山』という新聞を出すなど、それぞれの仏教協会の工夫が見られる。

なお、中国仏教協会と地方の仏教協会の間には、指導関係はあるが、組織としての上下関係ではなく、地方の仏教協会は完全に自主的に運営されているという。省などの上位の地方の仏教協会と、市などの下位の区域の仏教協会との関係も同様であるという。しかし、例えば、四川省の場合、同じ文殊院に四川省仏教協会と成都市仏教協会が置かれており、我々が懇談したのは四川省仏教協会の関係者であったが、両者の役割分担については、もう一つはっきりしないところがあった。

経済的には、中国仏教協会には政府の援助があるが、地方の仏教協会は原則的には政府の援助なしに費用を賄わな

ければならない。上海仏教協会のように、上海仏教実業社という組織をもち、大規模に収入を図っているところもある。通常は所属する寺院が費用を分担するが、その場合でもその地域の寺院の収入が上がらないと仏教協会の活動も十分に行なえないため、どこの仏教協会も観光や海外の華僑との交流など、収入の増加に努めているようであった。

三、出家と受戒

文化大革命で多くの僧侶が還俗させられ、宗教活動が停滞したため、多くの寺院で文革世代に当る中年層が薄く、それ以前の老年僧か、その後の青年僧が多い。特に最近は若い世代で出家の希望者が多く、青年僧の層が厚くなっている。第一線に立つ中年が少ないことは運営上困難が多いであろうが、青年の層が厚いことは将来に希望が持てるように思われる。九華山仏教協会では、副会長や常務理事に比較的若い住持を採用して、組織の若返りを図っている。全体的傾向は道教でも同じようであるが、上海の道教協会のように若い人が少なく、活動が停滞しているところもある。なお、一九八二年現在の中国全体の僧尼の数は、三八〇〇人強だというが、[5] その後も各地で盛んに授戒がなされ、新しい僧尼が誕生しているから、今日ではかなり増えているのではないかと思われる。

さて、出家希望者が認められるにはいくつかの条件が必要である。[6] 通常、満一八歳以上、初中（中学）卒業以上の学歴を有し、自ら願い、家族が同意し、地元政府の証明があるとき、寺で認められると出家できる。この段階では剃髪が認められてもまだ試用期間であり、一、二年経て、授戒を受けてはじめて正式の比丘・比丘尼となることができる。なお、筆者の見聞した範囲では、高中（高校）卒業の僧尼はいるが、大学卒の者は見られないようであった。

出家の動機については、上海社会科学院の調査報告があり、なかなか興味深い。それによると、主要な動機として

は、以下のようなことが挙げられている。(7)

1、宗教家庭の影響

これが最も多く認められる動機である。

2、仏教文化や文芸作品の影響

思想や芸術などへの関心から入るもので、一定の文化水準があり、向学心に富むが、家庭の影響によって出家した人よりは信仰の敬虔さにおいて劣り、単なる好奇心に発する場合もある。

3、消極的な厭世観により、仏教に解説を求めるもの

これには、恋愛や結婚問題、進学や就職問題、環境や心理問題などが挙げられ、環境や心理問題というのは、内向的な性格の若い人が、周囲の環境に適合できず、厭世的な思想を抱くようになるものである。

4、宿命論や迷信思想の影響

運勢判断によったり、巫術的な体験によるもの。自分が観音の生れ変りだと信じている人もいる。これらは農村や山村のような文化が比較的遅れたところの青年に多い。

5、その他

出家して都会に出たい、よい生活がしたい、あるいは金銭のために出家するなど、宗教的に不純な動機で出家する人もいる。少数ではあるが、社会で悪事を行なって在家のままでいられなくなり、出家する人もいる。

我々が懇談した範囲では、自らの信教によるなどの答が多く、やや抽象的で建て前を述べているという感じがしないでもなかった。成都文殊院の懇談ではやや立ち入って聞くことができたが、家庭の影響のほかに、やはり仕事の失

敗や失恋などによる人生へのあきらめによるものが多いとのことであり、目的のはっきりしない人もいるということであった。解放前には貧困のために口減らしに寺に入れる場合が多かったと言われ、それが仏教の質の低下につながったとされるが、今日では少なくとも表面的にはそのような人は少ないようである。しかし、出家すると最低限の生活は保証されるわけであるから、それが魅力になることもあるのではないかと思われる。

さて、寺に入って試用期間が過ぎ、二〇歳以上の人の場合、態度がよいと認められると正式に授戒を受けることができる。授戒の行事は出家者も在家者も合せて行ない、各地の仏教協会が主催するが、多額の費用がかかり、設備もいるため、大きな寺院でないとできない。その地域だけでなく、全国的に受戒の希望者が集まることも多い。

陝西省では、解放後早くも一九五七年に興教寺で伝戒が行なわれているが、その後長く絶えており、一九八五年に大興善寺で大規模な伝戒が行なわれた。この時は、受戒した人は一六〇〇余人、うち出家者が三〇〇余人、そのうち三分の二が比丘で、残りが比丘尼であり、在家者は女性が多かった。[8] 四川省の成都では文殊院と宝光寺の二寺で毎年交替で行なっているという。九華山では一九八六年、僧尼・居士ともに一一〇〇余人が受戒した。[9] 一九九〇年の調査の際、常州天寧寺でちょうど伝戒が行なわれており、立ち寄ったが、聞き取りなど行なうことはできなかった。

伝戒は三壇伝戒と呼ばれ、三段階で行なわれる。[10] 初壇では沙弥の十戒を授ける。このときは法堂などに集まり、集団で行なう。二壇は具足戒で、伝戒の中でも最も厳重に行なわれる。戒壇で、三人一組で行ない、三師七証により具足戒が授けられ、正式の比丘・比丘尼になる。三壇は菩薩戒で、大殿またはその前で集団で行なう。まず三聚浄戒を受け、三世の罪業を懺悔し、十四菩薩行大願を発し、それから出家者は十重四十八軽戒、在家者は六重二十八軽戒を受ける。在家者は、この最後の菩薩戒だけ受けるのである。一回の伝戒の行事に、人数が多いときには十数日かかる

ということである。なお、かつては二壇の後、焼香疤と言って、頭の上で香をたき、焼き跡を付けたが、今日これは禁止されている。

こうして授戒が終ると、戒牒が発行され、正式に比丘・比丘尼となるのである。出家者の戒牒を見る機会はなかったが、在家者の戒牒については、一九八八年の調査の際、たまたま陝西省の釣魚台で文王廟を管理していた居士から見せてもらうことができた。(11)

因みに、在家者の場合、受戒するよりも簡単に、師僧について皈依（帰依）を行なうことができるようである。この点、後述する。

最後に、道教の場合と較べてみると、道教では解放後今日に至るまで完全な形での正式な授戒は行なわれていない。これは道教の方が授戒の儀式が複雑で、容易に復元しがたいためだということである。我々が青城山上清宮で会った蕭当家は、一九四三年に受戒しており、戒牒や受戒のときの服装・道具などを見せてもらうことができた。(12)

四、教　育

若い僧の教育は各寺院毎に余裕のある時間に年輩の僧や居士を呼んで行なっているが、組織的には各地の仏学院で行なっている。道教では進修班で行なっているが、仏教の方が大規模に組織的に行なわれているようである。各地に仏教学院を作って僧の教育を行なうことは早くから試みられ、一九〇三年に長沙開福寺に湖南省学堂が作られたのをはじめ、解放前にも各地の寺院に仏教学院が設けられていたが、(13) 解放後は仏教協会の手で仏学院として統一的に行なわれるようになった。仏学院は、中国仏教協会で運営する中国仏学院と、地方の仏教協会で運営する地方の仏学院が

ある。中国仏学院は北京市の法源寺に置かれている。直接調査する機会を持たなかったので、高振農『中国仏教』の記述によると、以下の通りである。(14)

中国仏学院は一九五六年九月、中国仏教協会によって北京に創設された。それは専修科と本科からなり、専修科は二年で定員六〇余人、仏教教務の人材（寺院管理の専門的な人材）の養成を目的とする。基本課程として、語文・憲法の他、仏教歴史・仏教通論・仏学基本知識・仏教文物常識・仏教戒律などが学ばれる。本科は四年で定員四〇余人、仏教学術の研究と弘法の人材の養成を目的とする。基本課程として、語文・憲法の他、仏学通論・仏教歴史・因明・各宗大意・経論研究・仏教戒律などが学ばれる。その後、整備を重ね、一九六二年には蔵語仏学系も設けられた。こうして次第に活動が充実したが、一九六六年から活動が停止し、一九八〇年一〇月にようやく活動を再開した。最初、預科班として二年間、四〇余名が入学した。一九八二年に四年制の本科を復活し、四五名が入学した。基本課程として、仏学基礎・仏教経論・仏教史・宗教修持・政治・科学常識・歴史・中国古典文学・哲学・外語などが学ばれる。

中国仏学院には二つの分院がある。蘇州の霊巌分院と南京の栖霞山分院である。この二つは二年制で、それぞれ定員が五〇名くらいである。卒業後は、一部の者が中国仏学院の四年制の本科にはいる以外、各地で寺院管理に当っている。この他に、一九八二年には南京栖霞山に一年制の僧伽培訓班も設けられた。

地方の仏学院については、我々は上海仏学院と九華山仏学院を訪れ、特に九華山仏学院では話を聞くとともに、資料を恵与された。それらは本稿に付載しておいた。特に、「九華山仏学院招生簡章」（応募要綱）によってその概観が得られる。そこにも記されている通り、中国仏教協会は一九八六年に北京で全国漢語系仏教院校工作座談会を開

き、ようやく各地の仏学院の統一が図られるようになり、同時に高・中・初級の三段階の教育体制が整備されつつある。地方の仏学院は初級にあたり、中国仏学院の分院と省クラスの仏学院が中級、中国仏学院の本科が上級に当るのである。

同簡章によって概略を見ておくと、二年制で定員三五名。この他傍聴生（聴講生）若干名があるが、これは、不合格となった人を聴講生としてひとまず受け入れるのである。教授科目は別の「教学計画」に詳しいが、そこからもわかるように、語文は別として、英語に多くの時間が割かれている。これは養成目標の中に国際仏教文化交流を挙げているのに対応する。また、もう一つの養成目標に各地寺院の中級の管理の人材養成が挙げられているが、その為に財経管理の講義も設けられている。仏教の教学としては伝統的なものが中心で、サンスクリット語などの教授はない。浄土三経があるのはこの仏学院は浄土宗の人を中心とするためで、その他、地元の九華山の歴史もはいっている。在学中の生活保証や卒業後の進路のことなども、この「簡章」とインターヴュの記録からほぼ知られよう。

因みに、四川省の文殊院での聞き取りでは、仏学院出身者は少なく、エリートと言うべき存在であったが、上海玉仏寺などでは仏学院出身ということが当然のように扱われており、地方による相違が知られた。

五、寺院生活

1、寺院の種類と経済

文化大革命のあと、破壊された建造物の再建などに国家の補助が出されたが、その後は基本的には「廟を以て廟を養う」方針が立てられ、それぞれの寺院は各自で収入を図っている。そこで収入の多少にしたがって、経済的にゆとり

のある寺院もあれば、困窮した寺院もあることになる。収入の方法によって寺院を分類すると、以下のようになろう。

第一に、観光で多くの人が訪れる寺院。例えば、西安の大雁塔や扶風の法門寺など。これらは観光収入だけでかなりのものになる。上海の諸寺院にも内外の観光客が多く集まる。これらの寺院では宿泊施設やレストランを経営しているところも少なくなく、その副収入も大きい。なかには、博物館などになって、建造物のみ残され、宗教活動を行なっていないところもある。

第二に、仏事を多く行なう寺院。上海の諸寺院や九華山の寺院など。上海の玉仏寺や竜華寺では数箇所で同時に普仏が行なわれるなど、非常に盛んである。ただし、国内の信者の経済力は限られているので、大規模な仏事は海外の華僑に頼る割合が大きいようである。

第三に、主として寄付などに頼る寺院。坐禅修行を中心とする揚州高旻寺や西安臥竜寺など。これらの寺院では仏事などは余り行なわず（臥竜寺では少しはするようである）、寄付や他の寺院からの援助によっている。臥竜寺はそのためにかなり困窮しているようであったが、高旻寺では香港の華僑の寄付や国家の援助もあるということで、立派な禅堂も作られ、整備されていた。

第四に、我々の訪れた寺院では余り見られなかったが、農業生産や手工業で収入を上げているところもあるという。(15) 我々が訪れた中では、道教であるが、四川の青城山が茶の生産でかなりの収入をあげているということであった。

第五に、収入が少なく、かつがつ自給自足か、場合によっては困窮している寺院。我々が訪れた中では周至の仙遊寺や西安の雲居寺。仙遊寺は老僧が一応住職をしているが、ほとんど崩壊寸前であり、雲居寺は老尼を中心に宗教活動が行なわれているが、寺院の敷地そのものが工場から返却されず、困難な状態にあった。また、九華山に多くある

小さな寺院もかつがつ自給自足の様子であった。

なお、寺院はしばしば十方叢林と子孫小廟に分けられる。上記のうち、第五の小規模な寺院が子孫小廟であるが、九華山仏教協会の話では、今日、九華山では特に両者を区別していないということである。しかし、実質的には叢林に該当する大きな寺院は数十人が住んで組織だって活動しているが、小廟に該当する小さな寺院は個人の住房のような感じで、組織的な活動は行なわれていないようである。

なお、全国で一四二の寺院が全国重点寺院とされ、その他、省クラスの重点寺院も指定されている。[16] しかし、重点寺院だからといって、特別の国家の援助がなされているわけではないようである。

2、日常生活

小規模な寺は別として、数十人が共住する寺院では、規則にしたがって共同の日常生活が行なわれている。文殊院や九華山で聞いたところでは、大体の日課は、朝は比較的早く、四時頃起床。一―一時間半くらい、全員で朝課。全員で朝食後、各自の分担の仕事をし、それから昼食。昼食後も仕事。夕食前、または夕食後、一―一時間半くらい晩課。その後は勉強などして九―一〇時頃就寝というのが一般的のようである。

寺院内の職務としては、大きな寺院では住持のもとに監院・知客・維那・僧値・典座・寮元・衣鉢・書記の八大執事が置かれ、さらにそのもとに様々な職務が分れている。

朝課・晩課について見ると、『漢化仏教与寺院生活』によれば、朝課（早課）は二つのまとまり、晩課は三つのまとまりからなるという。一つのまとまりを一堂功課と言う。それぞれの内容は以下の通りである。[17]

朝課　一堂功課――『大仏頂首楞厳神呪』
　　一堂功課――『大悲呪』『十小呪』『般若心経』
　　通常は一堂功課のみ行ない、節目に両堂功課を行なう寺も多い。
晩課　一堂功課――『阿弥陀経』と念仏名
　　一堂功課――礼拝八十八仏と『礼仏大懺悔文』の読誦
　　一堂功課――蒙山施食
　　蒙山施食は毎日、あと二つは一日交替という寺が多いという。

なお、上海で入手した仏教念誦集は、毎日の朝課・晩課の他、祭日の念誦経典も含んでいる。その他にも類似の念誦集や儀規集も入手したので、その概略を注に記しておく。(18)

生活の規則として、本来十方叢林では厳しく清規が定められるべきものであるが、今日、必ずしもその点十分には行なわれていないようである。しかし、成都文殊院では規則が掲示されており、(19)揚州高旻寺にもやはり共住規則が掲示されている（後掲）。特に後者では実際にそれに従って生活されているようである。

規則に従わなかった場合の罰則は大体どこも同じである。最も重いものは教団の追放（摧単・遷単）であり、それにもその寺からだけ追放する場合と、僧の資格そのものを奪う場合がある。軽い場合は跪香（線香を立てて懺悔する）、さらに軽い場合は反省だけで済まされる。

生活費は通常寺から支給され、食費などで一部を寺に払うとしても、後は自由に使える。仏事などがあれば特別の手当も出されるというから、大きな寺にいれば、生活の心配はない。

一定寺院に定住する場合の他に、修行のために雲水として諸寺を遍歴することが行なわれる。いわゆる掛単である。これは今日かなり広く行なわれているようである。戒牒などを所持していることが必要だが、知客の判断でかなり自由に受け入れられているようである。

以上は通常の寺の場合であるが、上述のように揚州の高旻寺や西安の臥竜寺では坐禅の専門道場として、はるかに厳しい生活がなされている。特に高旻寺は大規模で組織だっており、内寮と外寮に分れ、寺務は一切外寮の人に任され、内寮の人は坐禅専門に明け暮れる。臥竜寺でも寺務は一部の人に任され、他は坐禅に専心している。その他の寺でも上海の玉仏寺などにも禅堂があり、坐禅が行なわれている。

3、年中行事

毎月、一日（初一）と十五日（十五）は仏教でも道教でも信者がお参りに集まるが、文殊院で聞いたところでは、それにとどまらず「誦戒」（説戒）が行なわれるという。これは布薩に当るもので、戒を誦して、違反したものは懺悔する儀式である。在家居士には毎月八斎戒を守る六斎日が決められているが、どの程度行なわれているかはっきりしない。

修行期間としてもともと冬と夏の安居があるが、多くの寺ではほとんど守られていない。ただ、臥竜寺や高旻寺ではそれに相当する修行期間が定められており、特に冬の期間に厳しい坐禅修行が行なわれる。これは「打七」と呼ばれるもので、打七には浄土宗における「打浄七」と禅宗における「打禅七」がある。これは七日を一単位として行なうもので、臥竜寺では四十九日間、高旻寺では七十日間行なうという。短期間の打七はその他の寺院でも行なわれて

いる。

中国の仏寺の年中行事として、様々な仏・菩薩の誕生日（聖誕）を祝うことに特徴がある。上述の『仏教念誦集』では以下のような聖誕が挙げられている。[20]

弥勒菩薩聖誕	正月初一日	観音菩薩聖誕	二月一九日
普賢菩薩聖誕	二月二一日	文殊菩薩聖誕	四月初四日
釈迦牟尼仏聖誕	四年初八日	韋陀菩薩聖誕	六月一九日
大勢至菩薩聖誕	七月一三日	地蔵王菩薩聖誕	七月三〇日
薬師仏聖誕	九月三〇日	阿弥陀仏聖誕	一一月一七日

以上の他、『漢化仏教与寺院生活』では、燃灯仏聖誕八月二二日、達磨祖師聖誕一〇月初五日を挙げる。また、釈迦牟尼仏については、出家二月初八日、成道一二月初八日、涅槃二月一五日、観音菩薩については成道六月一九日が祝われる。釈迦の場合はともかく、他の諸仏・菩薩の聖誕の根拠ははっきりしない。阿弥陀の聖誕は阿弥陀の化身である永明延寿の誕生日であり、弥勒の聖誕はその化身である布袋の誕生日であるという。[21] しかし、地蔵の聖誕とされる七月三〇日はその化身の金喬覚の誕生日ではなく、入滅の日のはずである。このように根拠ははっきりしないが、様々な仏・菩薩の聖誕を祝うのが中国仏教の特徴の一つである。これは仏教だけでなく、道教の場合も同様に諸神や祖師の聖誕を祝う。[22] もっともこのような聖誕をすべて同じように祝うわけではなく、釈迦に関する行事の他は、観音信仰の隆盛を反映して観音に関する行事がもっとも広く行なわれているようである。もちろん、九華山のように地蔵信仰の聖地では地蔵の聖誕が盛大に祝われる。

『仏教念誦集』にはこれらの仏・菩薩の聖誕の祝儀の方式が記されている。例えば、釈迦牟尼仏聖誕祝儀は以下のような手順で行なわれる。

1、香讃
2、念誦　南無楞厳会上仏菩薩（三称）・楞厳呪・般若波羅蜜多心経・摩訶般若波羅蜜多（三称）
3、讃偈
4、繞念　「南無本師釈迦牟尼仏」を唱えて繞仏する。
5、拝願　左右に分れて、諸仏・菩薩を唱拝する。
6、三皈依

なお、釈迦牟尼仏聖誕の際には、浴仏が行なわれる。これも重要な行事であり、『仏教念誦集』にその方式が記されている。

年中行事として重要なものには、他に盂蘭盆会がある。これは七月一五日に行なわれ、シンガポールにおける実態が鎌田茂雄氏によって紹介されている。[23] 筆者は特別な知識を持ち合せないが、『漢化仏教与寺院生活』によると仏壇・普施壇・孤魂壇の三つが築かれ、当日は浄壇・開壇・拝懺などが行なわれ、夜には普施が行なわれるという。[24]

4、仏事

仏事はそれを主要な収入源とする寺院が少なくなく、各地で極めて盛んに行なわれている。そのうちもっとも大規模なものは水陸法会（水陸道場）である。これは水陸一切の亡魂の済度を目的とするもので、七日またはそれ以上の

日数を要し、他の仏事も多くこの中に包摂される。九〇年の調査では上海竜華寺、九華山百歳宮で水陸法会を行なっているところに行き合い、かなり頻繁に行なわれていることが知られた。

小規模でより多く行なわれたのが普仏である。これには長生を祈る陽の普仏と亡霊を供養する陰の普仏がある。後者が放焔口（瑜伽焔口）で、大体三時間くらいで終る。これも本来は餓鬼の救済を祈るものであるが、多くは死者の供養に伴って行なわれる。

仏事については、寺院での聞き取りを主としたこれまでの調査では必ずしも詳しくその内容を知るには至らなかったので、今後の課題としたい。しかし、上海の玉仏寺などでは数箇所で同時に入れ替わり立ち替わり法要が行なわれており、驚くほど盛んである。もっとも大規模な仏事はほとんどが海外の華僑を施主としており、それだけ経済的に華僑に依存しているということである。なお、台湾やシンガポールにおける実態については鎌田茂雄氏の詳細な報告がある。(25)

六、信仰の形態

ここで在家者を主として、その信仰の形態について見ておこう。言うまでもなく、在家の居士は寺院における出家者をささえる重要な存在であるが、今日の中国では、中国仏教協会会長の趙朴初氏や同副会長の周紹良氏のように、居士が仏教界の指導的な位置にある。伝統的に居士仏教の盛んな上海では仏教協会の中心を担っているのは居士であるという。また、高旻寺や臥竜寺のような修行の厳しい寺でも、特に優れた居士の参加を認めている。

このように一部には優れた居士がいるが、では一般の民衆がどのような信仰をもっているかという点になると、寺

院での聞き取りなどからは必ずしもはっきりとはわからない。ただ、民衆の間ではかなり素朴な信仰が強いのではないかと思われる。道観である西安八仙宮でご詠歌のようなものを歌っている女性に歌詞のノートを見せてもらったところ、讃仏歌であった[26]ように、仏教と道教との区別も必ずしもはっきりしていない。九華山では信者向けに信仰の要訣を記したビラのようなものを幾種類か売っているが、特に目に付いたのは「三世因果文」である[27]。これは今世の幸不幸は前世の善悪に依ることを縷縷と説いたもので、上層部でのさまざまな議論にもかかわらず、民衆の信仰が非常に素朴なものであることをうかがわせる。

それと関連して興味深いのは、『九華山百歳宮応身菩薩事迹記』（浙江天台国清寺翻印、揚州観音寺にて入手）という小冊子である。これは九華山百歳宮に安置された無瑕和尚のことを記したものであるが、その後に付録として「最近往生記実十二例」が収められている。これは文字通り最近往生の奇瑞を表わした実例を集めたもので、例えば、その最初の張傑居士の場合、一九七五年に九三歳で亡くなったが、その時化仏化菩薩が来迎したという。このように一二例は居士・僧尼のいずれをも含むが、一九七〇年代から八〇年代というごく最近の実例ばかり集めたもので、今日日本ではすでに素直には信じられなくなった来迎往生がいまだに人々の信仰を集めていることが知られる。また、その小冊子には一九八三年に亡くなった霊巌寺の性寂法師の火葬後、舎利が得られた話も載せられている。この小冊子については、本稿第三節で紹介したい。この他、九華山では一九八五年に入寂した大興和尚が肉身菩薩（ミイラ仏）としてまつられているということであり（後述）、近代の日本ではすでに見られなくなった信仰の形態がいまだに生き続けているのである。

このような信仰は民衆の中に根付いたものであるが、同時に迷信的なものと結びつきやすい一面のあることも否定

できない。中国では迷信的な行為は正常な宗教活動から区別され、厳しく批判されている。最もどこまでが正常な宗教活動で、どこからが迷信であるか区別するのは難しいであろうが、例えば、「四川省仏教協会漢族地区寺廟管理辦法」第二十条では次のように規定している。(28)

厳禁神漢、巫婆和其他任何人在廟内搞請神降仙、駆病赶鬼、書符劃水、看相算命、風水陰陽、測字卜卦、燒胎画蛋、求筌、燒銭化帛、焚幽冥券等封建的迷信活動、更不得仮借仏教制造〝菩薩顕霊〟、〝菩薩托夢〟等謡言、蠱惑人心、擾乱社会治安、情節厳重者、送当地公安部門査処。

ここからわかるように、卜占や巫術の類が迷信とされるようである。民間にはシャーマン的な体験を持つ人も少なくないようで、上述のように、自分を菩薩の生れ変りだと信じて出家する人もあるという。こうした傾向は仏教よりも道教の方がさらに著しいのではないかと思われる。西安の八仙宮には「厳禁巫婆神漢、坑騙群衆銭財」という札が下がっており、「道巫婆神漢」の禁止が言われていた。

ところで、在家者の場合、正式に受戒するよりもより簡略な方法として、大きな寺院で師について三皈（三帰依）を受けたり、五戒を受けることができる。『仏教念誦集』には、「授居家二衆三皈儀規」「授居家二衆五戒儀規」が収められており、その儀式の概要が知られる。また、一九九〇年の調査の際、撫湖広済寺の売店で「三皈依証書」という小さなパンフレットを入手した。これに氏名等を記入し、師僧の証明を受けるのである。また、それには皈依の儀式の方法も記されている。注にその全文を掲げておく。(29) なお、四川省では皈依の方法が混乱したため、一九八四年に「四川省仏教協会関于正式皈依辦法的意見」が採択され、正式の皈依の方法を定め、それに従って皈依した場合のみ、正式の仏教徒としての権利を有することとなった。(30)

最後に、布教の一環として音楽が用いられていることに触れておこう。仏教歌曲は上海ではカセット・テープにも収められて、一般の書店でも売られている。[31] また、『音声仏事』という書物も刊行されている。この本について簡単に紹介しておくと、鑒定・黄智隆居士、編者・聞妙、浙江省天台山国清寺印行（一九八七年）。そこに収められた歌曲は次のようなものである。

最早用現代曲譜編写的一首仏教歌曲——三宝歌
以仏経経句編写的一首仏教歌曲——浄行品
寺院伝統梵唄選譜（十三首）
弘一大師撰詞、弟子劉質平居士等譜曲的《清涼歌集》（十首）
黄自、蕭友梅等音楽家編写的仏教歌曲（七首）
護生歌曲（十一首）
弘一大師（李叔同）出家前所作的歌曲（八首）

本書は弘一大師円寂四十五周年記念の本であり、特に弘一大師の作詞・作曲が多く集められている。

1　近年、中国では仏教の現状に重点を置いた研究書がいくつか見られる。特に白化文『漢化仏教与寺院生活』（天津人民出版社、一九八九。以下、『漢化仏教』と略す）は最も参考になる。また、寛忍編著『仏教手冊』（中国文史出版社、一九九一）は、本稿脱稿後、曹章祺氏より頂載したので、今回十分に参照できなかったが、仏教協会、仏学院など、今日の中国仏教を知るための基礎資料をも多く収録している。

2 羅竹風主編『中国社会主義時期的宗教問題』（上海社会科学院出版社、一九八七。以下、『宗教問題』と略す）、八一―八四頁。

3 以下、中国仏教協会については、主として高振農編著『中国仏教』（上海社会科学院出版社、一九八六）、一四五―一四九頁により、他書を参考にする。

4 「四川省仏教協会章程」（蜂屋邦夫編『中国道教の現状』本文篇、汲古書院、一九九〇。以下、『道教現状』と略す）、四八〇頁。

5 『宗教問題』二〇〇頁。

6 『中国仏教』一四四頁。『道教現状』二三三頁。「四川省仏教協会漢族地区仏廟管理辦法」九条（『道教現状』四三五頁）。

7 「部分仏教青年的信教原因初析」（『宗教問題』二〇〇―二一〇頁）。

8 王亜栄編著『大興善寺』（三秦出版社、一九八六）一四五頁。

9 『安徽九華山』（『中国仏教名刹』第一巻之十一）九頁。『九華山』（九華山仏協機関紙）第一期一九八九年一二月一五日号によると、同年九月一〇日より二七日まで、祇園寺で授戒を行ない、具足戒を受けた内外弟子九八二名（男五九四名、女三八八名）、五戒を受けた居士五〇〇余名であったという。

10 三壇伝戒については、『漢化仏教』一四七―一五三頁。

11 『道教現状』九〇―九一頁。同図版冊・図四六七。

12 『道教現状』図版冊・図八〇九―八一六。

13 『中国仏教』一二四頁。

14 同一四九―一五二頁。

15 同一四二頁。

16　同一四三頁。

17　『漢化仏教』一六五―一六六頁。

18　『仏教念誦集』（上海市仏教協会教務組編、一九八〇）。これには以下の内容のものが収録されている。

朝時課誦　暮時課誦　念仏儀規　供仏儀規　二時臨斎儀　祖師殿上供　浴仏典礼　釈迦牟尼仏聖誕祝儀
薬師仏聖誕祝儀　阿弥陀仏聖誕祝儀　弥勒仏聖誕祝儀　文殊菩薩聖誕祝儀　普賢菩薩聖誕祝儀　観世音菩薩聖誕祝儀　大勢至菩薩聖誕祝儀　地蔵菩薩聖誕祝儀　授居家二衆三皈儀規　授居家二衆五戒儀規　法師講経起止儀規
浄壇儀規　仏前大廻向　礼祖（浄宗祖師）　諸讃偈　法器点板符号説明　拝仏点板（附鐘鼓点板）　仏誕及斎期

このうち、授居家二衆三皈儀規・授居家二衆五戒儀規を除いたものが、同じ『仏教念誦集』の名でポケット版として出ている（上海市仏教協会印行）。

その他類、類似のもので、以下のようなものを入手した。

。『早晩念誦集』（天台山国清寺流通処）
　ほぼ近い内容で、放生儀規を含むなど、一部相違する。

。『法事儀規』（福建甫田広化寺）
　念仏儀規、普仏儀規、蒙山施食儀規、祝聖普仏儀規、浄壇儀規、諸讃語、仏前廻向偈、往生位前廻向偈などを含む。

。『禅門朝暮課誦』
　木版、唐本仕立てのもの。

なお、鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』（大蔵出版社、一九八六。以下、『仏教儀礼』と略す）の第二部資料篇には、台湾などで収集した儀規類が収録されている。

19　『道教現状』三三五―三三六頁。

20 『仏教念誦集』一九〇頁。

21 中国仏教協会編『中国仏教漫談』（江蘇古籍出版社、一九九〇）二七三―二七四頁。

22 その日については、『道教現状』二〇二頁に収録した上海欽賜仰殿の張紙に記されている。また、最近、表志鴻「道教節日」という論文が発表され（『世界宗教研究』一九九〇年第四期）、それに詳しい。

23 『仏教儀礼』二〇五―二一三頁。

24 『漢化仏教』一七一頁。

25 『仏教儀礼』に瑜伽燄口・水陸法会その他の報告がある。

26 『道教現状』四一頁。

27 上海静安寺で入手したものを以下に掲げる。九華山で入手したものは多少異なっている。

三世因果文

善男信女聴言因　聴念三世因果経
今生做宮為何因　三世黄金装仏身
黄金装仏装自己　説蓋如来蓋自身
騎馬坐轎為何因　前世修橋補路人
有食有穿為何因　前世茶飯施貧人
高楼大厦為何因　前世施米上庵門
相貌端厳為何因　前世採光供仏前

嬌妻美女為何因　前世仏門多結縁
父母双全為何因　前世敬重孤独人
多子多孫為何因　前世開籠放鳥人

今生無子為何因　前世採折百花芯
今生短命為何因　前世宰殺衆生命
今生守寡為何因　前世輕賤丈夫身
今生眼明為何因　前世捨油点仏灯
今生欠口為何因　前世吹滅仏前灯
今生駝背為何因　前世笑了拝仏人
今生撅脚為何因　前世攔路打劫人

三世因果非小可　仏言真語莫非軽
三世修来今世受　紫袍金帯仏前求
莫説做宮皆容易　前世不修何処来
穿綢穿緞為何因　前世施衣済窮人
無食無穿為何因　前世未捨半分文
福禄具足為何因　前世造庵起涼亭
聡明智慧為何因　前世喫斎念仏人

夫妻保守為何因　前世長幡供仏前
無父無母為何因　前世都是打鳥人
養子不成為何因　前世皆因溺女身

今生長命為何因　前世買物多放生
今生無妻為何因　前世偸奸謀人妻
今生奴婢為何因　前世忘恩背義人
今生瞎眼為何因　前世指路不分明
今世聾啞為何因　前世悪口罵双親
今生擲手為何因　前世都是造業人
今生牛馬為何因　前世欠債不還人
今生猪狗為何因　前世皆因騙害人
今生無病為何因　前世施薬救病人
今生餓死為何因　前世糟塌五穀人
伶仃孤苦為何因　前世悪心侵算人
今生吐血為何因　前世食肉去念経
今生瘡癩為何因　前世買肉仏枱熏
今生吊死為何因　前世繫索去山林
雷打火焼為何因　大秤小斗不公平

万般自作還自受　地獄受苦怨何人
不信喫斎多修舍　但看眼前受福人
若人毀謗因果経　後世堕落無人身
有人書写因果経　世代児孫家道興
有人講説因果経　生生世世得聡明
有人印送因果経　来世便得福寿全
若問後世因果経　郗氏堕落蟒蛇身
若人深信因果経　同生西方極楽国
三宝門中福好修　一文喜捨万文収

若問前生事　今生受者是

今生多病為何因　前世酒肉供仏人
今生坐牢為何因　前世作悪不讓人
毒薬死者為何因　前世薬物毒衆生
今生矮者為何因　前世地下看経文
今生耳聾為何因　前世誦経不悉聴
今生臭気為何因　前世和香売不真
鰥寡孤独為何因　前世蛆心嫉妬人

虎咬咤傷為何因　前世冤家対買人
莫道因果無人見　遠在児孫近在身
前世修来今世受　今生修積後世人
有人受持因果経　諸仏菩薩作証明
有人頂帯因果経　心情愉快工作順
有人高唱因果経　来生多人愛恭敬
若問前世因果経　武帝前世是何人
若是前世無感応　日蓮救母是何因
三世因果説不尽　龍天不虧善人心
以君寄在堅牢庫　世世生生福不休

若問後世事　今生做者是

他に九華山で入手したビラには、以下のようなものがある。

醒世詠（明）憨山大師

嘆世万空歌

羅状元十嘆無常歌　附十勧賢良詞

清楽法師遺稿　弟子智超整理

28 『道教現状』四三四頁。

29 三皈依証書

一切行門。必以共敬至誠。方得真実利益。故印光大師云。欲得仏法実益須向恭敬中求。有一分恭敬。則消一分罪業。増一分福慧。有十分恭敬。則消十分罪業。増十分福慈。若元恭敬。而致褻慢。則罪業愈増。而福慧愈減矣。是故求受三皈者。必生難遭之想。恭敬之心。如臨聖境。親聆聖音。則福慧随之而得。願諸同倫共。勉而行之。

授受三皈。須知三皈大意。若不解師語。或聴不清楚。皆不得三皈。故為師者。必自解三皈之義。使受者理解明白。方得実益。故今依印光老人。及弘一律師要義。供諸同倫。

皈依者。返本為義。如人帰家。如子依母。又皈依者。回転義。因前背棄三宝。而今回転故。三宝者。有自性、住持二種。自性三宝者。仏者覚悟義。即離念霊知之真如仏性。法者規範義。即自性霊覚。道徳仁義之規範。僧者清浄義。即心本具清浄無染之浄行。住持三宝者。仏者。即今一切仏像是。法者仏説三蔵。聖教一切経典是。僧即現前出家四衆。依法剃髪披衣者是。更有十方三宝。仏即十方三世一切諸仏。法即十方三世一切尊法。僧即十方三世一切賢聖僧。乃至一切凡夫僧。故皈依者。不当云我皈依某師。応皈依一切僧宝。上至菩薩羅漢。下至駆烏沙弥。皆是我師。此乃皈依僧也。切勿誤解。而遺大取小。廃公為私。当知某師不過受証之師。故特依印光老人及弘一律師之訓誨申明。

皈依要請

自皈依仏、従今以後、更不可皈依、天魔外道、自皈依法、従今以後、更不可皈依、外道典籍、自皈依僧、従今以後、更不可皈依、外道邪衆。

皈依証書

茲有信　俗名　　現年　　歳繫　　市省　　市県人。発心皈依仏法僧三宝。求受三皈。恭請上　　下　　律師為証受三皈本師。賜師名　　従今以後。応遵三宝教誡。断悪修善。信願念仏。発弘誓願。自行化他。尽未来際。永不退転。謹依律制。授汝三皈。将給此証為凭。

三宝弟子　　収執

証受師依本師　　発給

仏暦　　年　　月　　日

公元　　年　　月　　日

正授三皈分六

一　請聖師与大衆起立同念

香花迎　香花請　弟子某甲　一心奉請　尽虚空。遍法界。十方常住仏法僧三宝三請三拝

二　懺悔以下三段均師念一句。受皈者跟一句。　各称法名

往昔所造諸悪業　皆由無始貪瞋痴

従身語意之所生　一切我今皆懺悔

三　正授三皈　各称法名

尽形尽寿皈依仏。尽形寿皈依法。尽形寿皈依僧　三説

四　発願　各称法名

衆生無辺誓願度　煩悩無尽誓願断

法門無量誓願学　仏道無上誓願成

五　顕功德利益

灌頂経云。受三皈者。常有三十六善神。与其無量眷属。守護其人。令其安楽。校量功德経云。若三千大千世界。満中如来。如稲麻竹葦。若人四事供養満二万歳。諸仏滅後。各起塔廟。復以香花供養。其福雖多。不如有人。以清浄心皈依三宝。所得功德。

六　回向（我們所有功德　都応回向衆生皆得往生西方浄土　師唱一句衆跟一句）

受皈功德殊勝行　無辺勝福皆回向
普願沈溺諸衆生　速往無量光仏刹

撫弘一律師敬三宝文。略有増減

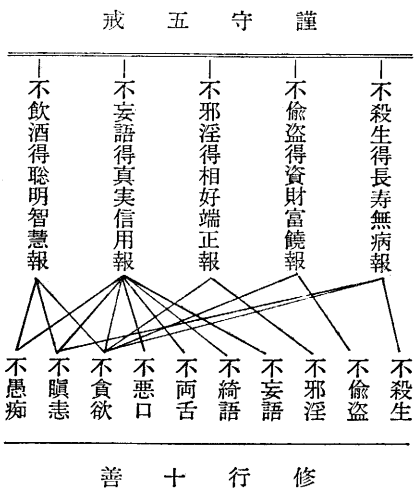
第一敬仏　対仏像作真仏想。宜謹守威儀。凡供仏之処。不可嬉笑。躺臥踞坐。如対貴賓。尚不軽便。況仏乎。礼仏不可草率。寧可少拝。人礼仏不得従彼頭前経過。仏前供具。常使清浄。供仏宜在午前。不得過中。過中無福招罪。仏制有過中不食之戒。水果亦然。供仏応用人能食者為宜。務心精美烹調。切不可用食物原料。及生物罐頭。供花宜新鮮。水応常換。香燭随力随分。紙像応装鏡框。塑像装入仏龕。大者用宝蓋。務使清浄。仏前不可放屁。晒晾衣服宜偏側。不得用夜壺水澆仏前花。臥室供仏。不得用溺器。不得裸体及穿短褂。睡時用布遮好。

第二敬法　法乃諸仏之母。菩薩之師。即如来仏身舎利。金剛経云。若是経典所在之処。即為有仏。若尊重弟子。又云在在処処。若有此経。一切世間。天人阿修羅。所応供養。又云。一切仏。及諸仏阿耨菩提。皆従中出。故必竭尽至誠。藕益大師之。開巻如対活仏。収巻如在目前。千遍万遍。寤寐不忘。乃得実益。捧経不可隻手。宜双手平胸。不得持経礼拝作揖。人離開。必須合攏。不可折角志記。宜用紙片夾之。不可経上印字涙写。令経損汚。残経宜補。不可焚化。

第三敬僧　僧乃三宝所依。故凡剃髪披衣皆為仏子。応一列恭敬。不可分別持戒破戒。有德無德。于一切僧宝。皆是師長。自称弟子。供僧応普同供養。梵網経。有別供戒云。世人別供五百羅漢僧。不如僧次一凡夫僧。最宜注意。僧人有過。在家人聞

之。万不可軽言。此為仏痛戒者。梵網経。有説四衆過戒。慎之慎之。

以上各挙平人所易犯者録之。以供同倫。務使遵行。而遠罪獲福。総之。欲得仏法中実益。須向恭敬中求。別無玄妙。願共勉之。



公元一九八九年歳次戊辰五月再版

仏暦二五三三

30 『道教現状』四三二頁。

31 このカセット・テープは『中国梵楽』と題され、戒定真香・水洛因・八句賛・準提咒・普庵咒が収められている（中国唱片公司広州分公司出版）。

第二節　九華山仏教の現状

一、九華山仏教の特徴

九華山[1]は、安徽省南部青陽県に位置する山脈で、九十九の峰があるという。主要な峰が九つあり、もともと九子山と言ったが、李白が九峰を蓮華の九弁に喩えて、「妙有分二気、霊山開九華」と歌ったところから、九華山と呼ばれるようになったという。九華山が仏教の霊地となったのは、地蔵菩薩の化身とされる金喬覚が八世紀に入山してからである。金喬覚の伝は、『宋高僧伝』巻二〇、『神僧伝』巻八などに見える。もともと新羅の王族の出身で、『宋高僧伝』によると貞元一九年（八〇三）、一説には貞元一〇年（七九四）、九九歳で入寂している。入寂後も遺体は生ける如くであったと言われ、その墓所に肉身殿が建てられている。後にこの地で盛んになる「肉身菩薩」（応身菩薩、高僧のミイラ）の信仰は、金地蔵自身に由来している。金地蔵をめぐる伝説は様々あるが、特に有名な話として、この地の地主閔公に一枚の袈裟で覆っただけの土地を乞い、袈裟を広げると九峰すべてを覆い尽くしたので、閔公はそのすべてを与えたという話がある。それ故、中国の地蔵菩薩像は通常両脇に閔公父子を従えている。

九華山の中心は九華街である。ここは山の中腹の盆地で、祗園寺・旃檀林・化城寺などがあり、土産物屋・飲食店・旅館などが並んで、門前町の形で繁栄している。青陽から三二キロ、撫湖から一六七キロ、南京から二七一キロで、ここまでバスが来ている。観光名所として名高い黄山が一六六キロのところにあり、黄山の観光と一緒に訪れる人が多い。九華山は最盛期には三百寺を数えたが、現在は七十八寺、僧尼は三百余人である。それらの寺院のうち、

祇園寺・旃檀林・甘露寺・慧居寺・天台寺・化城寺・上禅寺・百歳宮・肉身宝殿の九寺が全国の重点寺院であり、規模が大きい。ただし、化城寺は現在博物館となっており、寺院としての活動はしていない。また、甘露寺も仏学院となっている。

九華山の仏教の特徴は以下のような点に見られる。

1、地蔵信仰の山である。もっとも、祇園寺・旃檀林など、特に地蔵菩薩が祇られているわけではなく、地蔵信仰一色というわけではない。地蔵菩薩を中心に祇っているのは、肉身宝殿だけである。しかし、旧暦七月三〇日に行なわれる地蔵菩薩の祭には何万という信者が詰めかけ、大変な盛況であるという。

2、寺院建築に特徴がある。即ち、多くの寺院はいわゆる寺院式の建築でなく、民家と同じ建築様式になっており、また、山門・天王殿・大雄宝殿などが縦一直線に並ぶという通常の寺院の配置を取っていない。これは山中の地形の制約によるものである。さらに、祇園寺・肉身宝殿などでは、山門に霊官が祇られており、道教との習合の一面を見せている。

3、肉身菩薩（応身菩薩）の信仰が盛んである。上述のように、金地蔵自身がその先例となったが、現在残っているものでは、百歳宮に祇られた明代の無瑕和尚が名高い。無瑕和尚をめぐる話は、第三節に収めた資料に記されているので、参照されたい。文化大革命までは他に六体の肉身菩薩が祇られていたが、文革で毀されてしまったという。しかし、最近、新たに肉身菩薩が生れており、それに関しては、後に触れる。

以下、第二回（一九九〇年）の調査の記録と関連資料を主としながら、九華山の仏教の現状の一端を紹介したい。

二、九華山における仏教の現状

我々は、一九九〇年一〇月一九日（金）午後、九華山仏教協会関係者と座談会を行ない、九華山の仏教の現状について、かなり詳しく知ることができた。以下はその主要内容である。なお、九華山仏教協会は九華街にある立庵という小庵に事務所があるが、座談会は栴檀林において行われた。出席者は、恵深（五〇歳、[2] 旃檀林住持）、無垢（尼僧三二歳、化城寺負責人）[3]、張宜達（九華山宗教事務科科長）の諸氏であった。

(1) 組織

九華山仏教会――九華山のすべての寺を管理する組織である。その組織は、会長一名、副会長三名、常務理事一一名、理事三一名からなる。常務理事は理事の中から選出され、会長・副会長は常務理事の中から選出される。大きな寺の住持はすべて理事となり、小さな寺の住持は一部が理事に選出される。仏協の刊行物として、去年から新聞を刊行している。三カ月に一回で、六、七回刊行している。

会長は仁徳法師[4]である。仁徳法師は祇園寺住持であるが、現在は仏教協会で生活している。（仁徳法師は旅行中で会うことができなかった）

なお、安徽省仏教協会は合肥にあり、やはり仁徳法師が会長をしている。

寺院数――九つの寺が全国の重点寺院である。即ち、祇園寺、旃檀林、甘露寺、慧居寺、天台寺、化城寺、上禅堂、百歳宮、肉身宝殿である。

三〇箇寺が省クラスの重点寺院で、全部の寺院数は八〇余である。(5)

前山と後山に分れ、後山には一二の寺がある。

僧尼数——九華山全体で三八〇人くらい。そのうちの四〇パーセントが尼である。尼はほとんどが閔園にある二〇数箇の尼寺にいる。

年齢構成は、六十歳以上の人が三十パーセントで、残りはほとんど若い人である。中年の人はほとんどいない。

住持の任命——推薦に基くが、仏教協会の許可が必要。昔は十方叢林と子孫廟（弟子が受け継ぐ）の区別があったが、今はない。

いまは十方叢林の制度も変り、ここに常住したいときは仏教協会の許可が必要で、常住すると住職になる資格が得られる。

宗派——主として禅宗と浄土宗。禅宗は臨済宗が主であり、曹洞宗は少ない。禅宗と浄土宗の人が同じ寺に住んでいる。今は宗派の区別は少なくなる傾向にある。

(2) 戒律・規則

五戒及び比丘・比丘尼の規則を守る。また、それぞれの寺に規章制度がある。

罰則——最も軽いときは自己反省をする。その上は跪香を行ない、さらに重いときは食事の前に皆の前で反省する。最も重い罪は戒帖を没収して、教団を追放する。追放される人は少なく、ほとんどその前に自分から還俗する。

出家・授戒――出家するには十八歳以上で、中学卒業以上の学歴があり、郷の身分証明書を必要とする。また、家族の賛成を得ていなければならず、その上で尋問によって心境を確認して、認められると、寺にはいる。寺で一、二年の間の見習期間を経て、沙弥戒を受ける。

三壇大会の時は仏教協会が組織する。一九八六年には九〇〇人、一九八九年には一二五〇人が受戒している（常州天寧寺）。この時は全国から集まり、台湾・香港の人もいる。

年間の出家希望者は四〇～五〇人いるが、受け入れられるのはそのうちの半分くらいである。

九華山の定員は四〇〇人くらいである。

(3) 経済

九華山の寺院は三種類に分けられる。

1、九つの全国の重点寺院と古拝経台は、収入の五〇～六〇パーセントを仏教協会に納める。第一のタイプの寺全体で年間の収入は三百万元にのぼる。

2、小さい寺は自給自足をする。

3、後山の十二の寺は観光客がないので、茶・稲の栽培などの農業を行ない、足りない分は仏教協会が補助する。現在、第一のタイプの寺の金を第三のタイプの寺に回しており、年間四、五万元補助している。

収入源（第一のタイプの寺）――いちばん多いのが道場で、四十パーセントを占める。次いで、宿泊・食事代、入場料、寄付などである。

(4) 仏事

月祭――一日と十五日。菩薩の誕生日よりにぎやかで、信者が多く集まる。

年祭――釈迦・観音・地蔵・文殊・普賢・弥勒の誕生日はそれぞれの寺で行なう。

行なう時間は朝課の時で、二、三種類の経典を追加する。これは大体どこの寺も同じである。

地蔵菩薩の円寂の日（七月三十日）は、信者や観光客が二万人も訪れる。

観音や弥勒の誕生日と成道の日も賑やかである。

肉身宝殿では、旧正月に二、三百人の信者が、地蔵菩薩とともに過す行事がある。

その他の法要――水陸法会・盂蘭盆・焰口・梁皇宝懺・普仏・地蔵懺・仏七・蒙山施食など、ほとんどの種類の法要が行なわれる。普仏には、調度と調寿（消災）がある。

水陸法会は一回五万元で、七十人くらいの僧が加わる。百歳宮と祇園寺のみで行なわれる。一年に五、六回行なう。

焰口は一回三、四百元で、三時間くらいかかる。

道場を行なうのは、栴檀林・祇園寺・百歳宮の三寺である。

栴檀林では、七～九月には、毎月千回くらいの仏事を行なう。

冬の閑散期でも、信者の要求があれば仏事を行なう。

(5) 生活

一日の日課は次の通りである。

四時　　起床

四時半―五時半　朝課
六時　朝食
　その後、清掃、各自の執務
十一時　昼食
　午後、各自の執務
五時　夕食
六時―七時　晩課
九時　就寝（仏事を行なわない場合）

食事の時の儀式は、祇園寺では全員集まって行なう。その他の寺では、儀式は行なうが、全員集まるわけではない。

坐禅は一部の寺で一部の人が行なう。

雲水――大きい寺では寺の許可により、小さい寺では仏教協会の許可による。

三日間は無料で、それを超えると、食事代・宿泊費が必要。

長い場合は仏教協会の許可が必要。

雲水の希望者に対しては、戒帖と仏教協会の身分証によってチェックし、仏教のしきたりについてもチェックする。

生活費――食事代は各自十元負担し、残りは寺で補う。支給される生活費は、職務・肩書・年齢によって異なる

が、平均して六十元くらいである。住職は九十―百元くらいである。

小さい寺では自給自足であるが、寺によっては大きい寺よりも生活費が多いこともある。

臨時収入――通常の収入以外に、檀家から指名で寄付を受けることもある。

仏事の時には特別の手当がでる。

信仰の厚い人は、もらった金を貯めて寺に寄付する。

私有できる私物――特に制限はない。もらった金も自由に使える。

家との連絡――自由に文通できる。自分の収入を家に送ることもできる。親の病気の時は里帰りできる。

出家の動機――自分の解脱を願う心境による。失恋して出家する人もいる。

出家したが、宗教的弊害が多く、還俗する人もいる。

(6) 教育

仏学院――今年成立し、約四十五名が勉強している。ここは中級クラスで、二年間である。主な科目は、仏教基礎知識、哲学、中国古典哲学、印度仏教史、英語である。

冬の閑散期、十二―三月、各寺の住持と知識のある僧が、清規や儀式・お経の唱え方を教える。

仏教協会では、各寺の住持を集めて国の法令などを教育する。

(7) 歴史と建築、その他

建築の特徴――宮殿式が少ない。長江の南の普通の民家と同じ形が多い。

寺の伽藍も普通と違い、中軸線を中心にしていない。これは山の地形にしたがったからである。

祇園寺・化城寺・旃檀林は、殿の配置も他と異なる。

百歳宮は岩の上に建てられたが、何百年経っても毀れない。

歴史――東晋時代にインドの僧が来た。それ以前は道教の根拠地で、有名な道士が出ている。

もっとも盛んだったのは明、清時代で、三百以上の寺があった。

最初の仏学院が清末、民国初めに後山に作られた。近代の有名な僧は皆ここで教育を受けた。例えば、虚雲法師は、ここで三年間修行してから、全国を歩いた。台湾の白聖法師（かつての台湾仏教協会会長）もここで出家した。

歴代の有名人は皆ここを訪れている。例えば、李白・王陽明・蘇東坡・王安石。

最近の事件――八五年に円寂した僧が、八九年にミイラになっていた。現在、後山の双渓寺に安置されている。(6)

化城寺に近い寺の尼僧を荼毘にした後、舎利が出たこともある。

三、九華山仏学院の活動

九華山仏学院は九華街へ登る途中の甘露寺に置かれている。一九八九年に創設されたばかりで、いまだ十分に整備されているとは言い難いが、それだけに創建の熱意に満ちており、一九九〇年に訪問した折も歓迎して頂き、いろいろと話をお聞きするとともに、貴重な資料の提供を受けた。これらは九華山学院だけでなく、中国における仏学院の現状を知る上でも役立つものであるから、ここに紹介しておきたい。

まず、本項で座談会の主要内容を紹介し、次項で主要な資料を紹介したい。座談会は、一九九〇年一〇月二〇日

（土）午後、甘露寺（九華山仏学院）において行われ、出席者は印惺法師（知客）、聖吉法師（途中から）の二人であった。

(1) 創設の経緯

昨年（一九八九七）月に創設された。創設には仁徳法師も加わった。

最初は四川の昭覚寺から二人の密宗の僧を教師として招いたが、浄土宗の学生が多く、その教育に不適当で、学生が離反したこともある。

本年二月、仁徳法師が弟子の聖輝法師を北京から招き、その指導下に軌道に乗るようになった。

(2) 現状

スタッフ――院長は仁徳法師、副院長兼教務長は聖輝法師。専任の法師は三名。その他に、七名の知識のある居士が講義をしている。彼らは大学や高校を定年退職して、仏教に興味を持っている人である。

管理関係は、一般職員（居士）七名、管理人（僧）五名である。

学生――全国各地から募集する。現在、全体で四八名おり、そのうち正式の学生が四一名、聴講生が七名である。

一七の省と市から来ているが、安徽省の人が多く、九華山の人は八名である。すべて男性である。

資格としては、中学高校卒で、二〇―三〇歳、もとの寺で一年以上生活した人で、受戒は必要ない。

入学試験は一般的な文化知識のほかに、出家の心境や動機も尋ねる。

応募して不合格だった人は、聴講生として残り、再び試験を受ける。

宗派は浄土宗の人が多い。

カリキュラム――修学年限は二年間で、中等技術学校卒業と同資格になる。

主な科目は、仏教の歴史と知識、儀式や清規、数学、哲学、外国語（英語）、歴史などである。

教科書は、現在他の仏学院のものを用いている。

二年生になると、他の寺で仏事の実習もある。

卒業後――本人の希望により、もとの寺に戻ることも可能である。九華山仏教協会に所属して、九華山の寺にはいることもできる。

成績のよい人は、本人が望めば、試験を受けて北京の仏寺院で勉強することもできる。

生活――夏休みはないが、冬休みはあって、里帰りしたり、自分の寺に戻る。

朝課と晩課があり、食事も全員でとって、その際もお経を唱える。

日曜は休みで、自由外出ができる。

図書室・閲覧室の設備があり、また、テレビは土・日のみ見ることができる。

宿舎は二人部屋で、布団なども学校から貸与される。

経済――ほとんどが仏教協会の援助で、年間二十五万元かかる。

学生の生活費（食事代・宿泊費）は学院の負担で、もとのお寺から援助は受けない。一人当り、一月に二五―三〇元かかる。

甘露寺は現在仏学院の管理下にあり、仏事は行なわない。ここの修繕費として、一四万元かかったが、仏教協

会が負担した。

仏学院について――この規模の仏学院は、全国で九箇所ある。北京、四川（成都文殊院）マカオ、広東、普陀山、霊岩寺、山西（五台山）、上海、それにここである。安徽省ではここだけである。

四、九華山仏学院関係資料

九華山仏学院招生簡章

僧才的培養、直接関係到中国仏教事業的盛衰。中国共産党十一届三中全会以来、宗教信仰自由政策逐歩得到落実。在党和政府的領導関懐下、曽一度中断的仏教事業、又恢復和発展起来、並造就了一批人才、但這方面的工作還不能適応仏教事業発展的需要。為此、中国仏教協会於一九八六年在京召開了全国漢語系仏教院工作座談会。会上就今後如何辦好仏教院校的問題統一了認識、形成了《漢語系仏教院校工作座談会紀要》的文件。

《紀要》提出了層次明確的高、中、初三級的学制和各級院校的培養目標与教学要求。

九華山仏教協会根据中発（82）19号文件精神和《紀要》的要求、為了解決九華山仏教事業人才青黄不接的状況、在九華山管理処的支持下、決定開辦九華山仏学院。据此、本学院現制訂招生簡章如下：

一、性質

九華山仏学院是在当地党和政府的領導下、由九華山仏教協会開辦、以伝授仏教経、律、論為基本学科的漢語系中等宗教院校。

二、培養目標

以培養具有政治上熱愛祖国、堅持四項基本原則、信仰虔誠、能立足於仏教崗位、面向現代化、面向世界、面向未来、既有一定仏学水平、又有切実修持的国際仏教文化交流和各地寺廟的中級管理的人才為基本目標。

三、学制及招生名額

1、学制二年：招収学員三十五名、傍聴生若干名。

2、課程設置：仏学（仏学概論、仏教史、大乗起信論、教観綱宗、三論宗、唯識宗、律学）及古漢語、哲学通論、史地、政治、外語、財経管理、中医学、書法等課程。

四、招生条件

1、擁護党的領導和社会主義制度、年齢在二十歳至三十歳之間、品行端正的適齢僧人。

2、具有初中文化程度或同等学歴水平。

3、五官端正、六根具足、無各種疾病、身体健康。

4、無婚姻或恋愛関係。

五、報考辦法和有関規定

1、凡符合本招生条件者、可持身分証、戒牒和経本人所在地的県一級人民政府認可的寺廟介紹信来院報到。

2、報考者需交本人学歴証明、体検及一寸削髪照片四張。

3、考試科目仏学基本知識、語文、史地、時政、課誦。

4、考試日期：一九九〇年六月二十八日。

5、考試前可提来院進行試読和接受考察。

6、参加考試的各項費用、由本人目理。
7、凡来学院参加考試、必須僧儀整粛、厳禁穿著、携帯俗家衣衫。
六、有下列情形之一者得退回原地
1、来院試読期間、経本院体検対患有疾病、不符合考生条件者。
2、録取入院後、凡学習不認真、跟不上教学進度、不遵守学院規章制度、屢教不改者。
3、入院後持続患病三箇月以上難以堅持学習或患伝染病、精神病者。
七、在学習期間的生活待遇
1、学員生活食宿由学院負担安排、零星費用亦適当発給。
2、学院発給一定数量的僧服。
3、学員可享受在規定範囲内的公費医療待遇。
八、畢業後的去向及待遇
1、学員畢業後、由九華山仏教協会統一分配到各寺廟担任相応的執事。
2、凡留在九華山各寺廟工作的、由九華山仏教協会参照普通中等専科学校畢業生的待遇発給生活費。
3、才徳兼備者、可作為師資対象、択優選抜留院進修深造。
九、本招生簡章在九華山範囲内和全国各地寺廟内張貼、不対外張貼和登報。
（注）原九華山仏教学校《招生簡章》即行廃止。

九華山仏学院

一九九〇年六月十八日

九華山仏学院教学計画

為深入貫徹落実中発（82）19号文件有関培養宗教接班人的精神、貫徹落実中国仏教協会召開的（86）全国漢語系仏教院校工作座談会《紀要》所制定的仏教教育方針、加強僧伽教学工作、全面提高教育質量、促使仏教院校更好地培養徳智体全面発展的、符合中国仏教事業工作実際需要的、愛国愛教、学修並重的僧伽人才、以適応中国仏教事業的発展和国際仏教文化交流的需要。据此特制定《九華山仏学院教学計画》。

一、教学計画

本文所称教学計画、是指学院開学到畢業期間的課程設置的整体計画、它是九華山仏学院教学工作的科学安排。

二、学制

本院為漢語系中等専科院校、学制二年、共計四箇学期。恪遵仏制、結夏安居、不放暑仮、只放寒仮。每年度四十二週（包括復習、考試和節仮日在内）、每課四十五分鐘。

三、課程設置原則

課程設置的原則以教授経、律、論、各宗派的基本理論為立足点、做到戒、定、慧三学並重、大小兼容、内外学共挙。依此原則、課程開設比例為：仏学科目在整箇教学計画中占百分之六十、文、史、哲等社会文化学科占百分之四十。

四、課程設置具体安排：（見下表）

学　科	第一学期 21週	第二学期 21週	第三学期 21週	第四学期 21週	総課時
遺教三経	2×21	2×21			84
浄土三経			2×21	2×21	84
仏学概論	3×21				83
倶舎論	3×21	2×21	2×21	2×21	189
戒律学	2×21	2×21			84
中国仏教史	3×21	3×21			126
九華山簡史	1×21				21
印度仏教史			3×21	3×21	128
哲学通論	2×21	2×21			84
三論玄義		2×21			42
十二門論			2×21		42
維摩経				2×21	42
百法明門論			2×21		42
八識規矩頌				2×21	42
百論				2×21	42
禅宗大意		2×21	2×21		84
八宗綱要			2×21	2×21	84
梵唄	1×21	1×21			42
財経管理			2×21		42
中医秘方				2×21	42
語文	4×21	4×21	4×21	4×21	336
史地	2×21	2×21	2×21	2×21	168
英語	3×21	3×21	3×21	3×21	252
時政	1×21	1×21	1×21	1×21	84
書法	1×21	1×21	1×21	1×21	84
体育	1×21	1×21	1×21	1×21	84
講座	1×21	2×21	1×21	1×21	105

注：本表中課時包括試時間在内。

五、附則

本計画由教務処編制、原則上不則上不作更動。然在実施中、如遇特殊情況、個別科目可適情調整、其解釈権帰教務処。

九華山仏学院

一九九〇年七月二十四日

九華山仏学院僧行為准則及各項規則（『九華山仏学院管理規章制度彙編』所収）

九華山仏学院的学僧、必須勤奮学習、努力掌握仏教各宗教理及現代科学文化知識：切実修持、具有良好的宗教情操、立志成為徳才兼備的中国仏教事業的接班人。

一、日常生活中応自覚遵守的行為准則

1、熱愛社会主義祖国、擁護中国共産党的領導、維護民族団結、擁護祖国統一。

2、模範地遵安国家憲法和政府各項政策法令。

3、厳格遵安学院各項規章制度、上殿、坐禅、態度要恭敬虔誠。

4、学修並進、勤憤攻読、努力掌握仏教各宗教理及文、史、哲各科知識。

5、発揚〝六和〟精神、尊敬法師、老師、団結同学、謙虚謹慎、注重個人品徳修養。

6、遵安社会公徳、不沾常住及他人的便宜、維護学院的荘厳。

7、熱愛労働、積極参加学院組織的各項有益活動、搞好箇人和環境衛生。

8、不浪費水、電、粮食、不向学院提出超越実際可能的生活要求。

9、堅持体育鍛錬、健全体魄、保持飽満高昂的精神快態、做到威儀具足。

10、維護正常的教学秩序、遵守学習紀律、考試不作弊、不観着思想意識不健康的書籍。

二、課堂規則

1、上下課以鈴声為信号、予備鈴三声、上課二声、下課鈴一声。

2、予備鈴響後、学僧応立即前往教室、上課鈴一響、学僧必須就位坐好、法師、老師登上講台後、班長呼〝起立〟、全体学僧合掌致敬、法師・老師答礼後、始輕輕落座、不許弄出響声。下課時礼節与上課時相同。

3、上課期間、学僧除急病或特殊情況、経得授課教師同意離開教室外、一律不准離開教室、亦不准会客。

4、上課時不得遅到、早退、搞小動作、喫零食、互相談話或観看与上課科目不相関的書本。応保持良好的課堂秩序、凡遅到早退数達三次者、作一曠課処理、曠課三節者、記過一次。

5、学僧上課必須僧儀整粛、厳禁着拕鞋、穿汗衫和帯茶杯進八教室。

6、上課時不准随意提問、遇到不解或疑難之処、可先挙手、経教師同意後方可起立請教。

7、保持教室清潔、衛生与座位整斉画一、由班長負責分配与督促、各組打掃整飾工作。

8、学生必須輪流値日、値日生要準備好法師、老師飲用開水、負責擦好黒板、備好粉筆、維護教室的荘厳粛穆。

三、上殿規則

1、鬧鐘声、学僧衣袒整斉按序入殿、不准従殿中穿挿而過。

2、進入殿内、分両序高矮依次站立、礼拝後、対面粛立、手結弥陀印。目光垂視、不許左顧右盼。

3、跟随引磬声拝仏、応整斉一致、不得錯乱。

4、聽維那挙腔、即按腔虔誠念誦、不得閉目無声。

5、不得掉板拕腔及発怪音。法器為竜天耳目、必須依其高低快慢規律和姿式法則敲打、未経厳格培訓、不熟練者、不得随意使用法器。

6、下殿時依両序先後、緩緩魚貫而出。出入殿坎、進時、西序先邁左脚、後進右脚：東序先邁右脚、後進左脚。出時、西序先邁右脚、後出左脚：東序先邁左脚、後出右脚。不得錯乱。

四、坐禅規則

参禅就形式上説、以坐為主、坐是四威儀中最穏健中正的方法。姿態形式最為端正、故結跏趺坐是修禅的要道。但修禅之坐不同於一般之坐、故必須遵守以下規則：

1、聽叫香声、学僧身着大褂進堂行香、清衆行内圏、班首執事行外圏。

2、進禅堂、須做到心平気和、万縁放下。

3、聽打站香板、即行止歩、就進位入座、不得穿堂搶位依位：坐好後、可揺動其身及諸支節、約反復七八次、如按摩法、勿令手脚差異。

4、坐禅時、既可結半跏趺坐、以左脚置於右脚上、牽来近身。令左脚指与右膝斉：亦可結全跏趺坐、以右脚置於左膝上、再将左脚安於右膝上。為使安穏久坐、還可左右上下交替結跏趺坐、以適宜為准。

5、寛解衣帯、使其周正、頭靠衣領、身腰正坐、不得左右傾斜、前躬後仰、或依靠墻壁及屏障等物、応調身、調息、調心、手結弥陀印安於臍下、依教修習。

6、聽止静魚声、任何人不得出入禅堂、除放香和班首講開示外、堂内不得有任何雑声、有咳嗽者要用袖掩口、不准

有意出声壊道。

7、巡香人要緩歩、無声、見有低頭瞌睡者、用香板軽軽推醒。

8、聴開静引磬声、開眼微動身体、聴打板三下、即放腿下単順序出堂。

五、学寮規則

1、学僧必須按学院分配的学寮住宿、未経教導室批准、不得擅自調換学寮、更不得将外人帯進学寮或留宿。

2、自覚愛護公物、離開寮房応随手関好門窓、熄滅電灯、損壊学寮設施、需照価賠償。

3、厳禁在墻壁上刻画、写字、厳禁在寮房内或過道上焚焼廃紙；厳禁使用電熱器具或在線路上接灯頭和挿座；厳禁在学寮内焼香供仏、乱貼乱掛字画等。

4、按時作息、衣被擺放整斉、床下不許乱放雑物、室内保持清潔、每天堅持打掃。

5、袈裟、海青、毛巾等要放置得当、不准四処乱掛。

6、炎夏在寮房内、可着短衣、汗衫、但不得穿背心、拕鞋、褲衩等、出寮房則一律僧装整斉。

六、衛生規則

1、講究衛生、不得随地乱丟乱到雑物或廃紙。

2、整飾学院、每天早飯後分組包片、認真打掃、清除拉扱（包括花草下的紙片雑物）。

3、每星期六下午、大掃除一次、人人参加。

4、講究箇人衛生、做到勤洗晒衣服、半月理髪一次、経常洗澡、保持儀容整潔。

5、不准随地吐痰、乱丟果皮雑物、不許在寮房門前草地乱到汚水。

九華山仏学院作息時間（掲示）

起　床	4：45	午　休	12：30—2：30
上　殿	5：15	第四節課	2：45—3：30
早　操	6：30—7：30	第五節課	3：45—4：30
早　餐	7：15—7：45	自由活動	4：30—5：50
第一節課	8：30—9：15	晩　餐	5：30
第二節課	9：30—10：15	晩　殿	6：30—8：00
第三節課	10：30—11：15	自　修	8：00—9：00
中　餐	11：45—12：30	熄　灯	9：00

九華山仏学院日課表

		一	二	／△	一	一
		一	二		二	二
第一節	倶舎論	倶舎論	語　文	語　文	仏教常識問答	中国仏教史
第二節	仏教常識問答	仏教常識問答	遺教三経	語　文	地　理	中国仏教史
第三節	戒律学	時　政	地　理	遺教三経	英　語	九華山簡史
第四節	英　語	語　文	倶舎論	自　修	中国仏教史	書　法
第五節	英　語	哲学通論	哲学通論	梵　唄	体　育	書　法

6、玉観堂、由学僧輪流巡堂、並負責用開水燙洗碗筷。

七、作息制度

1、早晨聴叫香、立即起床盥洗。

2、聞鐘声、順序進殿做課。

3、聴打鈴声、即進教堂聴課。

4、晩間聴止静声後、立即関灯就寝、不許私自開灯閲読。

5、無論仮期或因事病仮外出、必須於晩間九点前、一律返院。

6、凡因学習外語、課誦、而使用録音機者、応設法配帯耳機、不准影響別人学習和休息。

八、会客制度

1、直系親属来院探親、需通過客堂和教導室、学僧不許私自接待、擅自留宿或陪同其出遊。

2、一般客友来訪、由客堂登記通知本人会客、近処十五分鐘遠処半小時；会客一律在客堂或接待室進行、不許

私自帯入学寮或教室等地。

3、上課時間一律不会客、一般会客、一律在課後進行。

4、遇有外事活動、学僧要注意礼節、不卑不亢；在談話中要按政策、法令、家事求是地介紹情況、厳禁有損国格、人格、僧格的行為；学員不得主動接触外賓。

九、附記

1、学僧執行本院各項規章制度的情況、作為期末総評的考核内容。

2、本院制訂之規章制度、其解釈権帰教務処。

一九九〇年七月十二日

五、（付）揚州高旻寺の現状

1、高旻寺の概略

一九九〇年の調査の際、その帰路に揚州に寄り、その地の寺院を調査することができた。しかし、ここはそれらについて詳しく述べる場ではないので、高旻寺についてのみ紹介しておきたい。というのも、高旻寺は今日の中国では数少ない坐禅の専門の寺であり、中国における坐禅修行の実態を知るのに適当と考えられるからである。まず、同寺で頂戴したパンフレットにより、同寺の概略を見ておこう。

江蘇省揚州市高旻禅寺歴史簡介

高旻禅寺位于江蘇省揚州市南郊、距城十余里之茱萸湾風景勝地、瀕臨大運河西岸、勢扼三汊洪流、雄距九竜真脈。占地面積広台佰陸拾余畝、可謂大矣、住衆常盈数千指、繋国内名刹。有史于隋、歴千余年、屢興屢廃、未逞詳考。旧有康熙皇帝行宮台座、康熙、乾隆二帝、多次南巡、凡臨幸揚州、皆駐蹕于此、今已廃、尚有遺址存焉。唐詩有腰纏十万貫、騎鶴上揚州之佳句。揚州古称都城、夏禹王位帝于先、隋煬帝建都于後、昔日雄風、于斯可見。是以人傑地霊、地霊人傑、早期高旻、即蘊育于此、良有以也。殆至有清以来、祖道中興、竜象迭起、雍正十二年、因閲玉琳国師語録有省、逐召其五世孫（時居宜興磐山崇恩寺）之天慧悟徹禅師入内、随機酬唱、対御談玄、深悦聖心、簾前賜紫、欽命方丈、住持高旻。由是大扇宗風、沢被遐邇。高旻自天慧徹祖中興以来、高僧輩出、代不乏人、其曰：了凡聖祖、昭日貞祖、如鑒澄祖、方聚成祖、道円仁祖、三徳成祖、徳慈演祖等……。伝語録者八九公。承先啓後、金碧聯輝、門庭遂日益光大。近代大徳虚雲老和尚、于光緒廿一年、時年五十六歳、自安徽九華山来寺参加冬季禅七、深自激励工夫用到山窮水尽時、忽状打失娘生面孔、如従夢醒、豁然開悟。最近高旻新建禅堂壹座、原来虚老開悟所住的老禅堂、仍妥為保護、開加修繕、留作紀念。本寺来果老和尚、于光緒三十三年、行脚帰来、径至鎮江金山江天禅寺禅堂銷仮、立誓以悟為期、不悟不出禅堂、自此通身放下、工夫日進、至光緒三十四年九月二十六日、晩六支香、開静槌子一下、猛然豁落、如卸下千斤担子、親見本来一面。此二老者、皆出自宗門。見古以来、禅宗諸祖遍天下、禅祖名刹遍天下、影響整箇仏教、至深且巨。爾後来祖老和尚、以法縁所繋、渡江之北、住持高旻、三十余年、潑天門戸、勇自担承、広接十方衲子、同参高旻之禅、其昇堂入室、発明心地者、又曷可勝数者哉！故有生死高旻之誉、蓋謂高旻寺乃用工辦道、了生脱死之大道場也。高旻寺不做経懺仏事、屏棄一切外来干擾、専提向上一着、走無路之路、参無心之心、四季行坐、長

香不断、毎年越冬打禅七拾箇、定為恒例。高旻寺無固経済来源、僧衆生活、雖一向清苦、但孜孜行者、皆能安貧楽道、遠近携来、高旻道風、因茲久盛。撫海内堅持坐長香者、屈指可数矣！所不幸者、如此大好高旻選仏道場、竟在十年活動之中、惨遭厳重破壊、以致一蹶不振、見者聞者、莫不為之頓足痛惜！于茲国運昌隆、人民安楽、国家宗教信仰自由政策、得到充分落実、高旻寺亦因之得以恢復重建。然而茲事体大、需款甚多、自挙乏力、仰祈十方善信、緇俗同仁、共出隻手、扶刹竿于既倒、踊跃輪将、俾宗風而不墜、是所至禱！

江蘇省揚州高旻禅寺住持徳林拝啓

一九九〇年二月

なお、同寺には以下のような規約が掲示されている。(7)

高旻寺共住規約

一　堅持四項基本原則、愛国愛教。

二　犯根本大戒者、不共住。

三　凡打架殴者、破口相罵、不共住。

四　不遵守常住規矩、無理取鬧者、不共住。

五　除住持外、任何人不得私収徒弟、也不得在寺外収皈依弟子。

六　凡未受大戒者、不挂単、不討単。

七　凡来寺挂単者、必須衣着整斉、手続完備、最多不得超過三天。

八　凡身份不明、形迹可疑或患精神異常現象者、概不留宿。

九　寺内僧衆、不得賭博、下象棋、吸煙等。

十　僧衆有病者皆在医務室診治、需外出就診者、由医務室出具証明、経客堂批准薬費方可報銷、否則、一切費用自理。

十一除公事及有病仮者外、僧人一般都要自覚上早晩殿。実行上殿考勤。経常不上殿、不共住。

十二禁止闖寮、僧人不得随意出山門、有事外出、須事先向容堂請仮。

十三寮房内不供仏像、不焼香点燭、以防火燭、不得焼電炉、電熱杯、電熱棒、火油炉、小鍋等、二板必須熄灯、小心火燭注意安全。

十四本寺首領職事中、年満七十歳、体弱多病者、可以不随衆。

十五不得私自化縁、不得脱離常住私搞経済活動。

十六凡来往居士、客人及私人来客、未経客堂許可同意、任何人不得私自留宿。

十七毎年定期実行退職、円職、請職制、如遇特殊状況、需要請職、由寺務委員会研究決定。

十八寺内僧人不得進行医病赶鬼、抽答算命等迷信活動。

十九凡持物出門、必須由客堂開出門証、門衛凭証検査放行。

廿　全体僧人服従寺内領導、加強組織紀律性、不得進行有損于高旻寺声誉和利益活動。

廿一寺内僧衆未経領導部門批准、不得私印流通一些不属於仏教典籍書刊等、違者査究。

本規約従公布之日起執行　　公元一九八九年八月二十八日通過

2、高旻寺における座談会

一九九〇年十月二三日（火）、一三時一五分～一四時

出席者：文常法師（四九歳、知客）

(1) 組織・経済

ここは昔の四大禅林の一つである。四大禅林はここ以外、鎮江の金山寺、四川の文殊院・宝光寺である。現在、八三棟の堂宇があり、僧は六〇数名いる。老年約二〇名、中年約三〇名、残りは若い人で、若い人は少ない。

住持は徳林法師（七六歳）、監院は松月法師であるが、松月法師は現在病気療養中である。住持は授戒のために現在常州の天寧寺に行っている。

文化大革命中は中学校の校舎などとして用いられ、寺院としての活動を停止していたが、一九八三年に寺に戻った。禅堂は香港の人の寄付で、五〇万元かかった。[8] 現在大雄宝殿を五年計画で建設中である。

経済的には、国が一人当り月に四五元援助している（食費を含む）。その定員は四五名である。入場料や仏事による収入はなく、大部分は寄付によっている。特に香港や台湾からの寄付が多い。医療費も原則として寺でもつ（宗教局が負担することもある）。また、参七の時の外部の参加者の生活費も寺が負担する。

寺院の組織としては、内寮と外寮に分れ、内寮に属する僧は約二〇名（全体の三分の一）で、坐禅に専念し、他の雑務は一切しない。残りが外寮に属し、炊事や掃除、野菜栽培などの雑務を行なう。内寮と外寮の人は固定してい

て、交替することはない。

(2)　生活・修行

日常生活は以下の通り。

四時　起床
四時半―六時　朝課
六時半　朝食
朝食後　内寮の人は坐禅、外寮の人は作業
一一時半　昼食
昼食後　内寮の人は続けて坐禅、外寮の人は昼休みの後、作業
二時―四時　晩課
六時半　夕食
夕食後　外寮の人も含めて全員で坐禅
九時―　自由

テレビ・ラジオ・新聞などはすべて禁止されている。

特別な坐禅期間として、参七がある。参七は農暦一〇月一五日から七日ずつ一〇回、計七〇日間にわたる。参七以外の時は一日一四本の線香を立てて坐禅するが（線香一本四〇分―一時間）、参七の期間中は二四本の線香を立てる。参七の時は三時半に起床し、朝課・晩課もなく、夜一〇時半まで坐禅をする。ただし、外寮の人は通常と同じである。

参七の時は、外部からも参加者が来る。あらかじめ申し込んだ人をチェックし、一回に四、五〇人受け入れる。ほとんどは僧であるが、ここに貢献のある居士は受け入れることもある。指導は老年の僧が担当する。

参七の時以外は特別の修行期間はない。

坐関といい、水に囲まれた関房に三年間こもる修行がある。この間、一切人に会わず、食事も外からロープで送り込む。現在はしている人はいないが、最近では二年三カ月籠っていた人がいる。その人は今は江西省に行っている。この寺で何十年も修行している人もいる。

1　九華山について紹介した邦語の文献として、鎌田茂雄『中国四大霊山の旅』（校正出版社、一九八七）、秦孟瀟編『中国仏教四大名山図鑑』（柏書店、一九九一）などがある。

2　本人がそう称したのであるが、『九華山』（九華山仏協機関紙）第一期（一九八九・一二・一五）によると、一九五〇年生れである。因みにその記事「九華山年青僧尼走上仏協領導崗位」によると、一九八〇年以来、九華山仏協は十七名の若い僧尼を南京栖霞山仏学院に送って学ばせ、現在それらの僧尼が活動の中心となっているという。

3　化城寺は現在博物館となり、寺院としての活動はしていないので、住持と言わない。

4　仁徳法師の伝は『安徽九華山』（『中国仏教名刹』第一巻之十一）二五頁に見える。以下の通り。

仁徳法師、俗姓朱、名徳海、一九二三年五月十四日誕生於江蘇省泰県、幼年在家郷上私塾、本人幼年身体有病、母親担心養其不大、請人算命、説是命該為僧。遂於一九三三年到本県隆昌庵剃度出家。一九四八年赴南京古林寺受三壇大戒。一九五一年到高羅寺担任知客。後又到西安茅蓬、江西雲居山真如寺等地参学、同年冬日到九華山定居。

法師刻苦鑽研仏学、専性修持、護持正法、普度衆生、世界各地有衆多信士帰依名下。法師定居九華期間、歴件九華山仏教協

会秘書長、副会長、会長、安徽省仏教協会会長、全国仏教協会常務理事、青陽県政協常委、安徽省人大代表、全国政協委員等職、一九八六年担任祇園寺方丈。

近年来、法師在培養仏教接班人、修繕寺廟、回復仏像方面作了突出貢献。得到海内外大法師、信仏居士們賛揚和支持。一九八六年応日本弁天宗宗務総長大森慈祥先生邀請、訪問了日本。今年八月応美国法師邀請、去美国訪問。目前仁徳法師正在弘揚仏法、普利衆生四処奔波。

5　パンフレット類によると、七十八寺という。

6　その具体的な記述が『九華山』（九華山仏協機関紙）第二期（一九九〇・五・一五）に見える。以下の通り。

九華山第八尊肉身――大興和尚　張宣達

仏家称父母所生的肉軀為肉身。『為肉身時、其所修行之境界已超至菩薩之深位者、可成肉身菩薩。』《楞厳経》八曰：『是清静人修三摩地、父母肉身不須天眼、自然観見十方世界。』

九華山是我国四大仏教名山之一、自唐以来、即供養肉身并称之為菩薩。至今已供奉過七尊肉身菩薩。最早的是唐代的金喬覚；依次為明代的無瑕和尚、清代祇園寺住持隆山和尚、甘露寺部監常恩和尚、翠雲庵住持法龍和尚、民国年間的竜池庵住持華徳和尚、水府廟住持定慧和尚。這些肉身菩薩大凡都是徳高望重、禅定苦修的法師、其肉身是他們苦修的結果、也是仏祖対仏教徒修身養性的最高賞賜。継第七尊肉身之後、九華山又保為了一尊肉身、這就是九華後山双溪寺原住持大興和尚。

大興和尚原名朱毛和、是安徽省太湖県牛鎮区、牛鎮大明村人、生于一八九四年一〇月、一九八五年二月一七日円寂于九華山双溪寺、享年九一歳。

大興和尚幼年随祖父朱漢臣、在安徽省屯溪蓮花塘寺、学習仏学知識、一九二五年到九華山百歳宮拝常法和尚為師、正式剃

度、在百歳宮五年期間、除学習仏教儀規、同時為斎堂挑水、一九三一年在南京古林万寿寺求戒、得戒和尚果慧法師、後一九三六年回百歳宮、十年中一辺堅持禅定、一辺参加労務、終日言語不多、堅持心静、一九四七年到後山双溪寺住廟、除参加種菜、摘茶等労作、他経常用気功給群衆看病、凡経他医治大人、小孩、病情部会全愈、深得群衆愛戴、給群衆看病従不収費、群衆為感激他、知道不収銭財、只好送給蔬菜、他為了不辜負群衆心意、有時也随縁収下。

一九八五年二月初、大興和尚因年老不慎悴傷、而臥床不起、二月十二日停食、後山僧尼、和群衆聞信前来看望了他、他告訴双溪寺当家妙恒和尚、他要走了、請求将遺体保存、二月十七日伝答了仏協会意見、同意他的請求、于是他口念阿弥陀仏、含笑涅槃。双溪寺将其遺体装缸。後山群衆為感激他的功徳、建了一座臨時塔院。一九八九年十二月份双溪寺妙恒和尚開缸起視、肉身保存完正、毛髪全在、喉節可弁、肋骨清楚、指甲与乾肉分開、但未脱落、而身上穿戴的帽、衣、鞋、袜已全腐爛、用細鉄糸串的十八顆仏珠、因鉄糸銹断、散落于缸中。現双溪寺僧人将肉油漆、準備装金供奉。

肉身即木乃依、也称乾尸、其成因大致有二：一是和尚苦修的結果。僧人終年供斎喫素、体内筋骨乾練、円寂前節食数日、腹中空無食物、極少脂肪、再者、老僧円寂後、遺体跏趺于特制的陶缸中、其四周塞満石灰、木炭、直至頸部為止、再合上缸蓋、在缸蓋与缸身接合処涂沾泥密封。爾後将缸放置于陰凉通風之処、使遺体与空気隔絶。木炭与石灰具有較強的吸潮性能、能使遺体迅速脱水。如果老僧円寂後、在缸中三年不腐、肢体干癟完整、則可装金供奉、便被尊為『肉身菩薩』。

九華『肉身』、歴史悠久、其防腐技術具有一定的研究価値、是仏教文化中燦爛的一頁。随着旅游事業的不断発展、它已成為不可多得的人文資源。

7 高旻寺については、来果『高旻寺規約』三巻（台平、一九六〇）が刊行されているというが、未見である。H. Welch, *The Practice of Chinese Buddhism*, Harvard University Press, 1967, p. 5 参照。

8 『九華山』（九華山仏協機関紙）第三期（一九九〇・七・三〇）に以下のような記事がある。

揚州高旻寺新禅堂落成

去年十一月七日、江蘇揚州高旻寺挙行新禅堂落成典礼。参加典礼活動的有省内外仏教界的諸山長老、居士及有関部門負責人等共四百余人。（中略）

高旻寺新禅堂是由香港陳鴻琛先生捐資建造的。這座建築呈不等辺八角形状、青碑緑瓦、古朴典雅。堂内光線柔和、空気流暢、清静整潔、可容納三四百人。新禅堂的落成、為弘揚伝法、継承和発揚高旻寺坐禅打七的〔一支香〕伝統提供了極有利的条件。

第三節　『九華山百歳宮応身菩薩事迹記』について

九華山調査の際、帰りに立ち寄った揚州観音寺で、『九華山百歳宮応身菩薩事迹記　附当代往生記実十二例』（浙江天台国清寺翻印）なるパンフレットを入手した。これは小型の三九頁からなる小冊子で、本文は明代に肉身菩薩として祇られ、現在も百歳宮で崇拝されている無瑕和尚の事跡とその後の経緯を記している。特に文革後の最近の情況をも記している点が注目される。その後、一九八三年に逝去した靈巌寺性寂法師の骨灰から舎利が得られた奇瑞を記しており、現代でもなおこのような舎利信仰が生きていることが知られる。

現代の中国における仏教信仰の実情をより如実に物語るのは、付載された「最近往生記実十二例」である。ここには以下の十二名の往生の奇瑞が記されている。

張烈居士　一九七五年没

顕境師　？

杜守居士　一九六八年没

新宝娘　一九五八年没
乞丐　？
安権和尚　？
陳氏　一九七九年没
周母　一九六五年没
経明師　？
谷傑波居士　一九八三年没
姚氏　一九五八年没
能述比丘尼　一九八六年没

このように、今日に至るまで往生の奇瑞が語られ、信じられているのである。ここに中国における民衆の根強い仏教信仰の一端をうかがうことができるであろう。

このように極めて貴重な資料であるから、以下に全文を翻刻紹介することにしたい。

九華山百歳宮応身菩薩事迹記

附当代往生記実十二例

浙江天台国清寺翻印

爾時諸世界分身地蔵菩薩、共復一形、涕涙哀恋、白其仏言。我從久遠劫来、蒙仏接引、便獲不可思議神力、具大智恵。我所分身、遍満百千万億恒河沙世界、每一世界、化百千万億身、每一身、度百千万億人、令帰敬三宝、永離生死、至涅槃楽、但於仏法中、所為善事、一毛一滴、一沙一塵、或毫髪許、我漸度脱、使獲大利。

《地蔵菩薩本願経》

安徽九華山百歳宮応身菩薩事迹記

無瑕和尚於明朝万暦年間、生於北京、宛平蘆溝橋。父母只生這一独子、二十四歳到山西五台山出家、法名海玉。五台山住二年後、二十六歳離開。從二月開始走、直到九月二十四日、共計七箇多月、方才来到九華山。上山四十多里、未見廟宇和僧衆、山上亦無人居住。於是海玉下山訪問郷民、知道唐朝時、仏教興盛、廟宇林立、但至唐朝末期、因当時皇帝信奉道教、迷惑方士之言、所以在一年内、把九華山全部寺廟完全拆光。所有僧衆趕下山去、故此山上四百多年没有和尚。

海玉訪問唐朝歴史、唐朝中期高麗国（朝鮮）王子来中国九華山修行、法名喬覚、於粛宗至徳二年、航海東来。卓錫九華、初栖東崖。白土雑粟而食。邑人諸葛節等、為建化城寺居之。貞元十年、年九十九歳、跏趺示寂。因霊異昭著、識者以為是地蔵菩薩化身、斂以缸葬。進塔於神光嶺。海玉問郷民；〝地蔵王的肉身存在否？〟郷民説；出家人把地蔵王的肉身埋在東南。第一山上、即現在九華山肉身殿。海玉聴講後、二次上山看此山頭地勢好、捜到一処龍頭石上、上咽下咽都対着唐朝地蔵王菩薩塔墓。在龍頭石辺搭一茅蓬、喫山頭野果、黄精、白荷、丹参、葛鶏為生。黄精十年長一

尺、一年指甲大、一年長一節；黄精九蒸九晒、日晒夜露、喫在咀甜如蜜棗、只要早上喫一次至下午不覚飢餓、有気力有精神、後又知喫生黄精、可保持七天不覚餓。海玉喫過後、精力充沛破舌血、書写《大方広仏華厳経》、毎隔二十天放一次血、放了三十八年、写成八十一巻血経。現閲此経、字体清晰端正、経国家評価為〝国宝〟、称海玉為科学人員。血経現存九華山歴史文物館。

海玉住山洞一百年整、未下山、未見人、未帯徒弟、直至一百二十六歳。九月十四上午、他把自己一百年歴史写好、放在身辺、就円寂生西。待至明朝末崇禎三年、派兵部尚書王大人衆九華山敬香、到東南第一山、当晩山頭放光、一道白光照到東南山上的塔墓。東南方山上塔墓也放一道光、両光対照、兵部尚書連夜帯人上山、此山無路無廟宇、只尋得山洞有一老人、已経坐化了。遺体是乾肉之身、兵部尚書検査遺物都已腐爛、但肉体還是原様、只是乾了、発現旁有所書血経和身世自伝、方知離坐化時間已経有三年另九箇月。

於是、把自伝呈報崇禎、崇禎称之為大菩薩化身、是地蔵王菩薩応世。便賜両幅扁額、両顆大印及一道聖旨。両次派王大人来九華山。現門前《欽賜百歳宮、護国万年寺》就是当年王大人建廟時帯来。另一扁額是崇禎三年所立《応身菩薩》、是当時望廷賜封、並蓋有崇禎玉璽、正堂上有九条龍。明朝就是這些歴史。

清朝康熙五十六年、後殿失火、火勢越来越大、廟中両位師父要把海玉請到外面避火、但是搬不動、師父們跪在海玉面前、並説崇禎為您老人家建的廟宇、将失於我們之手、您老人家的真身、今天也将損失、大家不忍。您不走、大家也都不走了！烈火四起、這時老人顕靈了、双手一捉、大火息滅、大殿没有焼着、伙房也没有焼到、其他殿堂全部焼光、現在供奉在百歳宮内的肉身像便是当年滅火双手提起時的姿式。

老人的神靈又到了江西景徳鎮瓷器廠、坐了七日七夜不説話、廠里人問老人要多少銭造廟、老人説：〝我不是要銭、

我要一支筆一隻碗、想写幾箇字、放在你們廠窯里燒幾箇字。〃結果出窯時、所有的碗上都有《九華山百歲宮》這幾箇字、一点数、八千四百隻碗、一起送到九華山百歲宮来、這些印字的碗、出家人都討去留作紀念、解放時還有二千多隻。廟前二聖公社便用此碗喫飯、現在還有。七八年四月東岩賓館、仏教会都用這些碗、現仏教会尚存一百隻左右。上述都是康熙五十六年的事。現九華山文物館展出了両隻碗。

康熙皇帝派人修造上山的石板路、又送了一部清朝的大蔵経供奉在楼上、以上是清朝歴史。

到宣統二年、後殿又失火、天下大雨、大火滅了。後来黎元洪做総統時把後殿又建造起来、把門前扁額又復制了、至今已七十五年。

一九六六年八月、晩上八時、幾位師父把応身菩薩肉身、蔵入廟外土中、掘了一箇坑、底下塡了磚頭、把他放在坑中、両顆宝印放在腿上、頂上撑両根鉄棍作支柱、用石板蓋好、再復泥土、両塊扁額和血経、自伝都蔵在天花板中的瓦溝里、歴時十一年。一九七七年中央辦公室副主任、帶了七箇警部来九華山訪問、並作了指示〃唐朝仏法興盛時、有三百八十多座廟宇、七千多僧衆；現在要慢恢復起来、修的廟、不要像上海城隍廟那様好看、応按唐代式様、走廊、門窗都不要改動。唐代九華山的八本山志、要整理出来、這様唐朝的歴史就清楚了。地蔵王菩薩有名気、九華山的石路是其他仏山所没有的、過去石路從青陽、大通、貴池通向九華山廟宇、石枚路有名気、九華山風景確実很好。我們這次等於到天上来走了一次、山頭的鳳凰松、很像鳳凰、有一千四百年歴史、世上少有、只此松為天下第一松、要訂出修建計画。從二聖修公路到山上、汽車到廟宇、如廟宇与佛像有損壊的応逐歩修好。〃普光一箇和尚瀝報領導人説；在文化大革命初、我們三人把応身菩薩蔵在土中十一年了、不知老人的肉体還在不在、請領導帶人去搶救。七七年十月下午四時、把老人的肉身從土中取出来、磚頭、鉄棍均已碎銹、石板和土都埋在身上、但他還是完好無損、領導打電話叫記者

来拍照、在人民画報上有照片刊登、画報上没有上金、也未載帽、七八年画報登出後、纔上金、戴帽。

崇禎発現肉身至今已三百七十五年。

海玉本人九月十四日円寂、至今已三百七十八年。

在北京生長至今已五百零四年。

又如広東省韶関南華寺中的祖師殿、供有六祖恵能大師肉身、左右為憨山、丹田両大師的肉身。六祖迄今已一千多年；百歳宮応身菩薩肉身至今亦五百多年、肉体不壊。他們都是自在地坐化、肉身並没有経過防腐処理及吸乾水分、這些都値得科学家們研究的問題。近代如霊巌山寺性寂法師：俗名関玉璋、遼寧人、卒業於東北大学外語系、任教半年。九一八事変南来、拝見印光大師、蒙開示後、発心出家、時年二十六歳。師出家五十余年、専持一句阿弥陀仏聖号、求生浄土、精勤無間。於1983、10月14日上午11点8分、吉祥而臥、身無病苦、心不貪恋、意不顚倒、預知時至、安詳西逝。享年77、僧臘51年。火化後、於骨灰中揀出大小不同之各色堅固子、舎利花、琉璃珠等数十顆、現在朱智超居士処尚存有両粒琉璃珠、供人瞻礼。如上這些事跡、要想全部了解、須向仏経上找答案。

今再附録最近的十二例確実的往生事跡於後。

附録最近往生記実十二例

慕西山人趙家駒　採訪核対後記実

㈠張烈居士化仏接引、従容西帰

張烈居士、字雲雷、別名石帆山人、楽清石帆江頭村人。是知名的民主人士。壮歳曽留学日本、致力於反帝維新運

動。後又反対袁世凱復辟称帝。嗣後国内軍閥混戦、他感時憫世、遂回頭学仏、帰依印光大師、法名師宏。当其上海初遇印老法師時、一見如故、相抱涙下。師勉専修浄業、脱離娑婆苦海。1922年、居士返里、与呉黎賓、胡耐翁諸大居士、創辦〝楽清居士林〟每逢初一、十五弘揚浄土、受益者万計。居士自奉倹約、為人慷慨、専修浄業、弘法利生。一九七五年九十三歳、臨命終時、見有化仏化菩薩来迎、連拜三炷香、従容西帰。当時生西勝境、其眷属均親見、伝頌。

㈡顕境師念仏往生、異香満山

顕境師出身東聯郷杏庄人、知識分子、教過書開過店、歴尽世縁、後在雁落山霊巌寺出家。他不喜住熱鬧寺院、隠居本山虎軒溜幽僻之処、専修浄土、一心念仏、臨終時異香満山、足力往西方浄土之明証。据了解他在家時、与上層人物談浄土。他們説、〝我們修浄土、今生不去、来世再去。〟他斬釘截鉄地対他們説：〝如何要等来生、必須今生発願、今生就生……〟顕境師対浄土法門、如此断疑生信、故在生西時得到了異香満山的瑞応。

㈢杜守居士安詳生西、天楽鳴空

龍潭村杜連守老居士、出身貧農、不識一字。解放後撫養子女成人、自謂家務已了、世事罷休。於是専修浄土、学弥経、三年成誦。真為生死、発願生西。某年其小女出嫁、他却離家到学前村雲霧庵。当時家人勸阻勿去説：〝今天有客〟、他説〝没有我事。〟一九六八年、年近八旬、自知時至安詳生西。臨終的当日村人曾聴到天楽鳴空、由近而遠望西而去。

㈣新宝娘預知時至、端坐西逝

楊村新宝娘、家貧如洗、深信浄土、発願往生、専念弥陀、不做其他作牒、寄庫等庸俗仏事、每天在家老実念仏、信願殷切。一九五八年秋後、示疾不起、其女問：〝媽媽要生西嗎？〟她説：〝尚未、且待両箇月後生西〟。到了農暦十

一月下旬、她已預知十二月初八申時生西、便公開告人。到初八日、身体転健、天亮自備香湯沐浴、換了浄衣、端坐椅上念仏。当日上午、村人一班又一班的来者新宝娘生西、見她面色好、仏声宏亮、便不信而去、到了申時果然端坐西逝了。

(五)乞丐戒律精厳、念仏往生

解放後、我多次到仙墻堂青蓮寺拜訪安権老和尚、他頻頻賛揚白石祠堂乞丐生西的典型事例。乞丐多年宿在白石祠堂、每天到隣近村庄、僅討口飯喫、不要米穀蔬等。乞丐不貪財特、不事積蓄、戒律精厳、別人東西、不与不取。例如白石祠堂頗大、秋収後、稲幹堆在祠堂裏、十月西北風起、乞丐仍把破席鋪在灰榻上眠。人家説他太笨、稲幹在旁、為什麽不拿来鋪暖。他説稲幹是別人的、不与而取等於盗。人家給幾隻稲幹他纔要。安権老和尚還説、他在家十一歳時、親見乞丐從破衣袋裏拿出銀元十箇、交給白石一位知心的老人説：〝我這十箇銀元、是從小未討飯時積儲起来的、備死後用。現我将在十天後生西、請代我収下、作料理後事用、買些灯芯買些油、請勿向人家討一文銭搞排場〟。在這十天之中、乞丐到附近村庄曽討過飯的人家、戸戸叫〝多謝〟並説明生西日子。人家再給他飯、他謝謝説：〝今後不喫飯、喝口水算了〟。人家疑乞丐発瘋、不信有生西之事。到時乞丐果然念仏西帰。那時当在清末。不知他的姓名和出身住址。

(六)安権和尚弘揚浄土、如願西帰

安権老和尚一生老実念仏、求生西方、弘揚浄土、自利利他。晩年住象陽郷長清寺。臨終時自知時至、身無病苦、在念仏声中生西。次日面色如生。

(七)陳氏守寡念仏、蒙仏接引

洞頭県大門郷寨楼村岳母陳氏、壮年守寡、教子有方、郷里称她為賢岳母。平時足不出戸、一心在家念仏。1979

年八十歳、臨命終時、叫家人快開大門、説阿弥陀仏前来接引、言訖而逝。這事由楽清県虹橋東街陳節卿口述。

(八)周母正念分明、撤手便行

楽清県談汗郷黄塘村周母、平時専修浄土、老実念仏。1965年春忙時因病十余天未食。三月二十三日其子向母説、近日正挿田、大忙季節、不好走。母説等幾天無妨。到三月二十八日間児田挿好没有、児説已挿好、周母便叫其子去叫其女来。待女児到後、周母便在念仏声中生西。

(九)経明師精進念仏、寤寐一如

楽清県虹橋孝順村法雲寺経明師、六歳出家、壮年応酬経懺、不講究戒律。晩年受困、寄居清江姪家、乃回心専修浄土、毎深夜念仏、姪認為妨礙人家睡眠、因而討厭他。他説我是在睡夢中念仏、並不是故意驚吵別人。臨命終時、自知時至、在念仏声中生西、境界很好。

(十)谷傑波居士帰依正教、微笑往生

楽清県虹橋鎮四村谷傑波居士、壮年信天主教。解放後由其八村親翁呉徳標居士帯他到翠雲寺聴経聞法、経是浄法師開示後、便捨天主教而回頭信仏、専修浄土、老実念仏。1983年上半年其妻去世後、他在当地三官堂裏念仏。対蓮友説：〝上半年我妻去世、下半年我要生西、一年両起喪事、担心児子一人負担太重。〟到了農暦十一月下旬有微疾、他叫其女阿砕前来叫我、説〝父親要生西、叫你前去〟、那天是十一月二十六日。我到他家向他説法、叫他放下万縁、一心念仏、求生西方。他点点頭。二十六、二十七両日都有輪班助念。到了二十八日上午10時許、他坐起双手合掌、在念仏声中微笑生西。村裏人者見無不称賛。其子感動遵照其父生前遺嘱、全家喫素。一直到十二月初一日出喪以後、以報四恩。（此則由趙是徳記実）

㈩姚氏老伴同修、方発坐化

楽清県慎海郷上葉村王錫森居士之妻姚氏、今年（1985）79歳。姚氏両老経常到翠雲寺聴経聞法、深信浄土求生四方。1985年古暦正月初四日姚氏感身体不暢、但飲食如常。正月初五下午四時30分、両老坐在楼上仏堂前方発上念仏。姚氏便在端坐念仏中、安詳坐化。次日面色如生、隣人見後都嘆為希有。（此則由王錫森居士、法名真祥、親口所述。）

上述十多例生西事跡、其出身各有不同。有的現宰官；身有的是乞丐；有的是知識分子；有的一字不識；有的家庭富裕；有的一貧如洗；有的少年出家、戒行不究、晩年回頭念仏；有的先信外道後転仏道。総之其身世雖有差別、而専修浄土、成就浄業則一、良以信願持名、法門広大、三根普被、利鈍全収。弥陀願力宏深、有信願持名之因、必得往生極楽之果。

蓮宗二祖善導大師云：大聖悲憐、直勧専称名号者、正由称名易故、相続即生、若能念念相続、卒命為期、十即十生、百即百生。何以故、無雑縁正念故、与仏本願相応不違教故、順仏語故。若捨専念、修雑念者、百中希得一二、千中希得三四。上述十幾例生西確証、即二祖所謂専修者。世人為念仏者多。生西者少、就因雑念紛飛。有的好高騖遠、見異思遷、今日張三、明日李四。由於平日信願不够、臨終手忙脚乱、貪恋世務、纏綿床褥、一月半載、苦楚万分。有的念仏専求現世家門吉利、来生人天福報、不求生西。有的念仏半信半疑、願雖発而不懇切。有的自卑自屈、自謂業重障深、生西無分。甚至正邪不分、做牒、寄庫、還受生等等、無所不為。着相貪功、深為可惜。

一句阿弥陀仏、深信切願、求生極楽、実是無価宝珠。奉勧世人快快回頭、受用無窮。況且法華一乗大法、正明衣裏明珠、人人本具、当蒙阿弥陀仏接引、決無虚言。閲過以上十幾則具体例子、希望大家放下万縁、一心念仏、都摂六

根、浄念相継、入三摩地、同生極楽。

仏経和仏教書籍、都能使人們憬然覚醒、明了宇宙人生的真相、洞察〝因果律〟決定着人們逆順苦楽的遭遇、人們完全可以凭自己的努力、止悪行善、来掌握自己的未来、改造自己的命運。仏経更為人們指示心性的極談、一切衆生都可以凭勤修戒定慧的学仏功行、従生死流転中、得到究竟解脱、乃至圓成佛道一福慧円満的最高覚悟境界！因此、敬請対於仏教経書、務須恭敬閲読、珍愛保蔵、広布流通、獲福無量！慎勿軽慢毀棄、致獲罪愆、至要至禱！

従生命的現象中、去体会認識真正的本心、自性、真我、達到当下覚悟的現量境界。従現実世界中、透過現象去認清宇宙的本来面目。

修持功夫必順去雑専修、一門深入、方能成就。口念心行、時時観照。以平等心、至誠心対待一切人事。功夫成熟、漸得第六識不分別、第七識不執着、第八識不落印象。自性清浄自在為自受用、対外慈悲利他、令得法楽為他受用。講経説法、和対待一切人事、用心如鏡、従自心中流出、不須思量分別也。

諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教。

帰依三宝、発菩提心、修戒定慧、通達無漏。

㈢能述比丘尼往生紀実　　随侍弟子仁慈　仁覚敬記

能述比丘尼是吉林省遼源市弥陀寺的住持、任遼源市政協委員、仏教委員会付主任。師於一九八六年農暦四月初八日一釈迦牟尼仏聖誕日、往生了西方浄土、並出現了罕見的瑞相、現将情況記実如下：

能述法師是遼寧省庄河県人、父是農民、早亡。母王氏、篤信仏法、生了她兄妹共三人、兄亡、遺有弟妹二人、弟出家為僧。師出家前、是作服装的工人。全家五、六人的生活、都由她負担。後因当地災情較重、生活困難、在親友的幇

助下、同母来到了遼源市弥陀寺。師依隆徹師（已往生）、剃度出家。由於師幼承慈和的庭訓、生秉仁孝的資質、出家後、真為生死、発菩提心、究心仏理、専修浄土、惟法為重、惟仏是親、上求仏道、下化衆生、難行能行、難忍能忍。対於寺務精心料理、鞠躬尽瘁、不避風雨寒暑、終日奔走忙碌。自一九七九年、落実党的宗教政策後、師与各級領導及有関部門取得聯繋、使弥陀寺逐歩得到回復、真実作到了愛国守法、愛教尽責！

能述法師平時在修持上、行往坐臥、執持弥陀聖号、精進不已、二六時中、念茲在茲、在四月初七日早晨七時許、下山到財政局聯繋工作、上午回来後、就到大殿荘厳阿弥陀佛像、並収拾整理拝塾、迎接釈迦牟尼仏聖誕。下午、師対弟子仁覚仁菩説：〔如果師父現在往生、你們哭不哭能定住心嗎？〕倆人説：〔您真往生、我們不哭、能定住心。〕仁覚接着説：〔師父身体這麼好、現在也不能往生、您別説這往生的話、等把廟修好、挙行開光典礼；等我到三十多歳長大了、您再往生好不好？〕能述法師説：〔好！師父現在不往生。但是功果円満了該走、誰想留也留不住。功果没円満想走也走不了。〕説完話、仁覚和仁菩、也没在意。喫完了晩飯、就上殿、師還領唱〔戒定真香賛〕、又念了三声〔蓮池海会仏菩薩〕、看着仁慈笑了一笑、並告訴大家念観世音菩薩、還左手握着仁覚的右手、右手摸了三下仁覚的臉、提了提衣領、笑一笑、就不説話。経過医生検査説：有必要到医院治療。経寺内諸師及弟子們護送到院、住了一夜、始終没有休麼感覚、也没睡眠、也没説話、第二天早晨七、八点鐘、又送回寺内。当天（農暦四月初八日）九時正就停止了呼吸、世寿六十六歳。寺内僧人和居士們整整念了三大三夜的仏号。

四月十一日送師遺体至火葬場火化。在火化時、炉門開放、従始至終在炉前看：着的有隆蔵師、隆参師、能体師、能澄師、仁慈、仁覚、仁弘、仁菩、仁法、等出家人；還有張秀英、大宏、慧清、慧婷、慧琴、景居士、趙居士、李占英等居士、共有一百多人、輪流観看了火光中出現的奇迹。首先、大家看到右手出現了蓮花；又従心胸前出現蓮花；左手

出現千手千眼観世音菩薩、甘露瓶特別明顕、一会又出現白衣大士、接着又看到西方三聖；左右両脚各出現一朶大蓮花、頭上的花瓣特別大而明顕、仁慈還看到身上出現了釈迦牟尼仏知形象、張秀英看到了象弥勒仏的像等等。火化後的骨色有：金黄色的、緑色的、天藍色的、銀白色的、浅紅色的。総之、種種瑞相、上百人都看到了。有些原来不信仏的人、也信仏了。幾天之中、有一百多人帰依了仏教、現在前来帰依的還絡続不絶。這一切説明了能述比丘尼平日発心真切、功夫扎実、也説明了仏法真実不可思議！

人天路上　修福為先
生死海中　念仏第一

随侍弟子仁慈、仁覚和南記実
遼源市弥陀寺住持隆蔵法師証明
現場恭送荼毘四衆弟子一百人共同親見

一九八六年五月二十三日

化深信願持仏名号発浄土正宗

所謂深信者、釈迦如来梵音声明、決無誑語。弥陀世尊、大慈悲心、決無虚願。以念仏求生之因、必感見仏往生之果。如種瓜得瓜、種豆得豆、此不待問仏而能自信者也。

執持名号、当宜懇切。如嬰児之思慈母、如避怨家之相逼迫。如堕水火之求救援。持一声是一九蓮種子、念一句是一

往生正因。直須心心相続、念念無差、唯専唯勤、無雑無間、愈久愈堅、転持転切、久之久之、自成片段、入一心不乱矣！

敬請常念

南無阿弥陀仏　求生浄土

敬請常念

南無観音菩薩　消災降福

敬請常念

南無地蔵王菩薩　利益冥陽

您要得到精神的大安慰嗎？

您要得到人生的真快楽嗎？

您要増進您的学識嗎？

您要明了宇宙人生的究竟嗎？

那麼請您研究仏経、敢保満足您的願望！

以上のように、本書は極めて注目される資料であるが、その分析検討は今後の機会に委ねたい。ここでは、その一例として、最後に記された西方往生の第十二例の能述比丘尼の場合について、簡単に見ておきたい。この能述比丘尼の往生の記録は弟子の仁慈・仁覚の手になるものである。

それによると、能述比丘尼は吉林省遼源市弥陀寺の住持で遼源市政協委員、仏教委員会付主任であった。師は遼寧

省庄河県の人で、父は農民であったが、早く亡くなり、母に育てられた。出家前は服飾工場の工員として生活を支えていたが、生活の困難から弥陀寺に入り、隆徹師のもとで出家した。師は一九七九年の党の宗教政策の実施以後、各級の指導者や関係部門と連絡して、弥陀寺を復興させた。師は日頃から弥陀の聖号を執持していたが、（一九八六年）四月七日午後、弟子の仁覚・仁菩と言葉を交した後、夜重体となった。翌日、午前九時に六十六歳で亡くなった。

四月十一日に火葬に付したが、その時、火中に奇跡が生じた。右手に蓮花が現われ、胸のところにも蓮花が現われた。左手には千手千眼観世音菩薩が現われ、また白衣大士や西方三聖も現われた。右左両足のところには大きな蓮花が現われ、頭上の花弁は特に大きくはっきりしていた。仁慈はさらに釈迦牟尼仏の像を見て、張秀英は弥勒仏の像を見た。火葬後の骨には、金黄色、緑色等さまざまの色のものがあった。これらの瑞相を百人もの人が見たのであり、これまで仏教を信じなかった人も多く信ずるようになった。

以上がその概略であるが、そこには簡潔な記述の中に、貧困の中から出家し、革命や文化大革命の嵐を経て出家者としての一生を貫いた一人の女性の姿がうかがわれる。その往生の奇瑞は、集団心理のなせるものと言ってしまえばそれまでであるが、故人の人徳と信仰厚い人々の共感から生れた宗教的世界であり、現代中国の民衆の中に根差した仏教信仰の姿を垣間見ることができる。